

寛政期前後の大田南畝

— 狂歌界との関わりを中心に —

兵庫教育大学院学校教育研究科
教科・領域教育学専攻・社会系コース
M09163G
渡邊 希

【目次】

はじめに	1
第一章 大田南畝の人物像	3
第一節 大田南畝の生涯	3
第二節 大田南畝に関する先行研究	11
第二章 出版統制令と南畝	15
第一節 出版統制令	15
第二節 出版物の変化	23
第三節 南畝の交友関係	30
第四節 幕臣の顔と文化人の顔	40
おわりに	47
資料編	
表 1 南畝の執筆、刊行、編纂に関する表	52
表 2 交友関係年表（抄）	55
表 3 大田南畝略歴	59
大田南畝年表	

はじめに

大田南畝は戦前までは蜀山人の名でよく知られた存在であったという¹。その程度は一休和尚と肩を並べるほどであった²というから驚く。

その大田南畝とは江戸幕府の下級役人であり、かつ四方赤良や蜀山人の名前で有名である狂歌師、文化人である。狂歌は天明期に大きく花をひらかせ、盛んに詠まれるようになる。その要因は、文化の担い手がそれまでの時の権力者や上層階級の人たちから一般の人たちにまで大きく広がったためである³。このことにより、江戸文化は大衆文化とまでいわれるようになった⁴。しかし、松平定信による寛政改革の一つ、出版統制令により、狂歌をはじめ黄表紙、洒落本などは大きな影響を受ける。むろん、南畝も影響を受け、それまでの活動や作品に変化がみられるようになった。

本論文では、大田南畝が刊行した作品の変化や交友関係の変化、幕臣としての身の置き方の変化から南畝が幕臣と狂歌師の二足の草鞋をいかに使い分けていたのか、その経緯を考察したい。ひいては、寛政改革の出版統制令によって南畝にどのような変化がみられるのか考察する。

また、浜田義一郎氏や野口武彦氏らによる先行研究によって、南畝は狂歌界との関わりを天明七年（一七八七）に絶ったということが定説⁵になっている。しかし、本論文ではその定説に疑問をなげかけ、南畝は狂歌界と何らかの形で関わりをもっていたという視点から考察していく。

本論文を通して、南畝による出版物や交友関係を明らかにしていくことで、これまでの先行研究とは違った視点から南畝の変化を考察していきたい。

なお史料の引用にあたっては、史料の体裁、字体を尊重しつつ、必要な場合は常用漢字に改めた。

- 1 杳掛良彦 『大田南畝』 ミネルヴァ書房、二〇〇七年、一、四頁。
- 野口武彦 『蜀山残雨』 新潮社、二〇〇三年、十三、一六頁。
- 2 杳掛良彦 前掲書1、三頁。
- 3 西山松之助 『大江戸の文化』 日本放送出版協会、一九八一年、一五四頁。
- 4 右に同じ。
- 5 浜田義一郎 『大田南畝』 吉川弘文館、一九六三年。
- 杳掛良彦 前掲書1、二〇〇七年。
- 野口武彦 前掲書1、二〇〇三年。
- 野口武彦 「大田南畝の『転向』」(『江戸文学の詩と真実』 中央公論新社、一九六七年) など。

第一章 大田南畝の人物像

第一節 大田南畝の生涯

大田南畝は大田直次郎といい、名は覃ふか、寛延二年（一七四九）に江戸牛込仲御徒町で生まれた。父は正智といい、幕府の御徒¹をつとめていた。幼い頃から多賀谷常安や内山賀邸に師事する。直次郎は賀邸のもとに十五歳で入門し、この頃から南畝という号を使いはじめ²。賀邸は南畝について「コノ児マサニ大成スベシ」と明詩擢材のなかで述べている³。賀邸のもとに入門したことにより、南畝は門下生であった岡田寒泉・唐衣橋洲・朱楽管江などの御家人や町人であった平秩東作など、その後の人生で大きく関わる人物たちと出会う⁴。

明和三年（一七六六）、南畝が十七歳のときに初めての著書で作詩用語字典『明詩擢材』を出版する。この頃、南畝は太宰春台の学統をついでいる松崎観海に入門している⁵。

南畝は多くの文化人と交流をもつようになり平賀源内とも出会う。南畝は、明和四年に第一作目の戯作『寝惚先生文集』を刊行し、平賀源内が序文を寄せている。次いで明和六年（一七六九）には、「一作目の『売飴土平伝』を刊行し、挿絵を浮世絵師の鈴木春信が描いている⁶。

明和六年には、唐衣橋洲の最初の狂歌会に参加し、翌年の明和十五番狂歌合にも参加している。このころの南畝は、「四方赤人」の狂名で活動しており、その後まもなく「四方赤良」と改めた。これは、当時のはやり言葉であった「鯛の味噌ずで四方のあか、のみかけ山の寒がらす…」をもじったものであった。四方の赤とは、和泉町の酒屋で売る四方の赤味噌の略であるという⁷。

安永三年（一七七四）に、南畝らは宝合を催した。これは、この頃流行した寺社の開帳に霊宝の展示があることを風刺したもので、各自が持ち寄った宝を比べた。参加者は十余人で、その中には国文学者の塙保己一といった

人物もいた⁸。

南畝は狂歌会に出席したりするなど盛んに活動したが、御徒であるため生活が逼迫する状況がしばしばあった。そもそも御徒の俸禄は七〇俵五人扶持という低いもので、多くの御徒は内職をするなどして家計を補っていた。そのような中南畝は、天明期になると贅沢な遊びを積極的に行うようになる。特にこの頃は土山宗次郎孝之との関わりが多いことが『三春行楽記』¹から見受けられる。次にあげるのは『三春行楽記』の一部分である（読み下しは『大田南畝全集』にかかれていているものを全面的に参考にした）。

五日 晴、陪土山登之流霞夫人、遊勾欄、觀傀儡戲、世所謂中戲場也、演本鏡山旧錦画、一場畢、登中戸楼、
唱曲者竹本住太夫、至飲飲夜闌、是日也、菅江・内海・嘉十・伴七亦与焉

（五日 晴。土山沾之及び流霞夫人に陪して勾欄に遊び、傀儡戲を観る。世に謂ふ所の中戲場なり。演本は鏡山旧錦画なり。一場畢りて、中戸楼に登る。曲を唱ひし者は竹本住太夫なり。飲飲して夜闌に至る。是の日、菅江・内海・嘉十・伴七も亦た焉に与ふ。）

十二日 同文竿子、陪万年氏・金子氏、遊中戲場、觀傀儡戲、呼三歌妓、曰阿仙、曰阿皆、曰阿兼、夜宴雅
松楼

（十二日 文竿子と共に万年氏・金子氏に陪して、中戲場に遊び傀儡戲を観る。三歌妓を呼ぶ。阿仙と曰ひ、阿皆と曰ひ、阿兼と曰ふ。夜、稚松楼に宴す。）

三月三日 過土山沾之、作曲水宴、同菅江・嘉十・三井氏飲酒、歌妓阿加与亦至、夜逃席至万年氏、至則布施氏・青木氏・長滝氏・文竿子及歌妓阿仙・阿兼在坐、合樽促坐、杯盤狼籍、余大醉臥文竿宅、天明帰舎

(三月三日 土山沾之を過ぎり、曲水の宴を作す。菅江・嘉十・三井氏と同一に酒を飲む。歌妓阿加与も亦た至る。夜、席を逃れて万年氏に至る。至れば則ち布施氏・青木氏・長滝氏・文竿子及び歌妓阿仙・阿兼、坐に在り。樽を合はせ、坐を促し、杯盤狼籍たり。余、大酔して文竿の宅に臥す。天明けて舎に帰る。)

俸禄の少ない御徒であつた南畝には頻繁に遊ぶ経済力はなく、当時勘定組頭を務めていた土山の援護があつたことを窺わせる。

また南畝は、吉原松葉屋の遊女三保崎を妾にしていた¹¹。三保崎を身請けしたときのことが『松楼私語』にある。

松葉楼中三穂崎 更名阿賤落蛾眉 天明丙午中元日 一擲千金贖身時

12

右の詩から三保崎の身請け金が高かつたことがわかる。この身請けにかかつた費用も当然ながら土山が援助していたと考えられる¹³。この遊女を妾にしたことや土山との関係が、この後の寛政期に大きく影響してくるのである。

そのときの南畝の家の様子がわかる記述がある。

かたつぶりのつのをちぢめてはいり、蟹の甲ににせて穴をほるも、家といふものゝなくてかなはねばにやあらん。かりこものみだれしこもうちかぶり、露霜の宿やしとも身をはふらかしすてざらんかぎりは、膝をいゝの窮屈ならんより、足のばすほどの家居なからんやと、あらたにひとつのやどりをしむ。もとより二尊堂にいまし、妻子室にみてり。しのゑんがはのはしつかたに、ひとつの妻戸をひらきていれば、ひろさわづ

かに十疊ばかり、こゝに四方のまらうどを迎ふ。維摩が方丈の玄関にて、八万四千の獅子を舞はせし類なるべし。その北に三枚敷あり。東面に戸をあけて、しやらくさきつくえを出せり。蛩こい／＼雪こん／＼の場所なるべし。すべて財乏しければ物ずきなし、床なければ違棚もみえず、かけ物は壁にかけ、柳は隣からのぞく。渋柿はあるにまかせ、草はどころまだらにぬかしむ。土蔵の目の上の瘤こぶとなり、雪隠のはなのさきにわるくさきも、かの南のやのかき、東どりの下水をいとはざりし、司城子罕しじやうしかんがむかしをしのび、望海の亭、見山のたかどの、きら／＼しききはあらねど、張天錫ちやうてんしやくが勸化をもて、家居をいとなみしたぐひに似たり。わが家にくるとしくる人、わが門に入としいる人、こゝにのみこゝにわらひ、こゝにうたひこゝにたのしむ。のむものは何ぞ四方のあからなり。うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり。もしそれ陽春の白雪糕はくせうかうも、また小児のたはぶれなり。いづれをか高しといづれをかひくしとせん¹⁴。

南畝が身請けするにあたり、離れを建てたことがわかる。しかし、禄が少ないことから、その広さは十疊と三疊で違棚もない質素なものであることが窺い知れる。また、ここに南畝の門下生が集まり、狂歌、狂詩の会が行われたこともわかる。

その天明期は、狂歌などが流行したときであった。この時期に南畝は最初の狂歌集である『万載狂歌集』を、唐衣橋洲はそれより一足先に『狂歌若葉集』を出版している（表1参照）。南畝は、『万載狂歌集』の続編である『徳和歌後万載集』を出したり、『狂歌三十六人撰』や『狂歌才蔵集』といった狂歌集を出している（表1参照）。狂歌だけでなく狂詩も書いており、『通詩選』『通詩選笑知』『檀那山人芸舎集』『通詩選諺解』などを出版した。南畝はこれにとどまらず、黄表紙を評判記のかたちで批評した『菊寿草』や、『拳角力』『此奴和日本』『二度の賭』などの黄表紙も出版する。

天明期頃は、狂歌会の開催や吉原などでの遊びも非常に盛んであり、南畝の行動がもつとも盛んなときであつ

たといえる。大田南畝の狂名である四方赤良という名前は世間的に有名になっており、このことを示す次のような狂歌がある。

高き名のひゞきは四方にわき出でて赤良くくと子どもまでしる¹⁵

これは当時の俳人大島蓼太りょうたが詠んだもので、また、

世の中の人には時の狂歌師とよばるゝ名こそおかしかりけれ¹⁶

とあるように四方赤良として活動した南畝は江戸の民衆まで知られるまでになっており、南畝が狂歌・狂詩の担い手になっていたからであると考えられる。

田沼意次が失脚し、老中首座となった松平定信が寛政改革に着手するようになって以降、南畝は筆を置き一切狂歌などを作らなくなったといわれる¹⁷。それは改革によるものだけでなく、親しかった勘定組頭の土山宗次郎孝之が処刑されたことも大きく関係していたといわれる¹⁸。土山が処刑されたのは、田沼期に行った公金横領だけだけでなく、土山自身も遊女を妾にしたことが大きかった。『寛政重修諸家譜』には土山の罪状について、

七年十二月五日、行状よろしからず、遊女を妾とし、かつ先年娘病死せしところ、これを包み置き、他家の女を貰ひうけ実子同様にいたすべき心底にて、親類をしるしてさゝぐる書にも娘二人と書のせ、しかのみならず御勘定組頭勤役のうち御買米の事にあづかりし時、公より出さる処の金子私に融通して五百余両を貪り、剩へ御買米の残り滞りしを糺明きやうめいせらるゝにいたりて逐電せしことも、其罪軽からずとて死刑に処せらる¹⁹。

と明記されている。

土山の逐電に関係した人物に平秩東作がおり、急度叱の処分を受けている。浜田氏の指摘によると、天明三年（一七八三）から翌年にかけて東作は蝦夷旅行をしており、実は土山の内命によるものでないかと噂されていた

ため、このころ南畝が出そうとしていた『狂歌才蔵集』に載せられる予定であった東作の蝦夷に関する歌や土山らと遊んだときの歌は急に削除され、それによって出版された『狂歌才蔵集』には不自然な空白がうまれたという²⁰。

この土山の関係や妾の一件が公に知られたり、あらぬ疑いをかけられないようにするために、南畝は狂歌界との関係を絶ったといわれる²¹。

南畝は寛政六年（一七九四）に登用試験を受け、御徒から支配勘定に昇進している。その後も、享和元年（寛政十三年）には大坂銅座、文化元年（一八〇四）には長崎奉行所に役人として赴いたりした。大坂では、木村兼葭堂や上田秋成らと関わりをもち、長崎ではレザノフに会ったことが、息子の定吉にあてた手紙に「使節レサノツト逢申候」と記されていることからわかる²²。長崎から帰った後の文化五年には玉川巡視を行い役人の責務を果たす²³。これらの経歴からも南畝が役人として有能であったことがうかがえる。

その一方で南畝は、寛政期にはまったく狂歌などとの関係を絶っていたが、享和年間にはいと再び蜀山人として狂歌をつくるなど、文化人としての動きが見られるようになる²⁴。蜀山人という名は、大坂銅座勤務のときに銅の異名である蜀山居士にちなんで名づけたものである²⁵。

南畝は晩年『蜀山百首』『杏園詩集』『杏園詩集続編』などを刊行し、文政六年（一八二三）に七十五歳で没した。

註

¹ 御徒とは徒歩で仕える役目で、將軍外出の際乗り物の前後左右の警固、平時は城内の要所の持ち場へ詰める

役目であり低い身分であった。

2 浜田義一郎『大田南畝』吉川弘文館、一九六三年、八・九頁。

3 「明詩擢材」(中野三敏・浜田義一郎・日野龍夫・揖斐高編『大田南畝全集』第六卷、岩波書店、一九八八年、五六九頁)。以後、『大田南畝全集』の編者名、各巻の出版年(一九八五・一九九〇年)を省略する。

4 浜田義一郎 前掲書(2) 七頁。

5 浜田義一郎 前掲書(2) 十五頁。

6 浜田義一郎 前掲書(2) 二六頁。

小林ふみ子『天明狂歌研究』、汲古書院、二〇〇九年、二一四頁。

7 「四方の留粕」(『大田南畝全集』第一卷) 二二四頁。

8 浜田義一郎「南畝の狂歌・狂文」(『大田南畝全集』第一卷) 五二五頁。

9 浜田義一郎 前掲書(2) 四・五頁。

10 『大田南畝全集』第八卷、三一・四四頁。

11 浜田義一郎 前掲書(2) 一一四・一一六頁。

『大田南畝全集』第十卷、一一頁。

12 右に同じ。

13 沓掛良彦『大田南畝』一四三頁。

14 「四方のあか」(『巴人亭記』(『大田南畝全集』第一卷) 一五五・一五六頁。「巴人亭記」は『大田南畝全集』第一巻の「四方のあか」の中にあるため上記の表記とした。

15 「奴胤」(『大田南畝全集』第十卷) 四六六頁。

16 『大田南畝全集』第一巻、五二四頁。

17 浜田義一郎 前掲書(2) 一三七頁。

18 同右書、一三五・一三七頁。

19 高柳光寿他編『新訂寛政重修諸家譜』第二十一、続群書類従完成会、一九九一年、「土山孝之」の項(二六六・二六七)。

20 浜田義一郎 前掲書(2) 一二二・一二八頁。

21 同右書、一二八頁。

22 揖斐高「細物推理の精神」(『大田南畝全集』第八巻) 七・四頁。

沓掛良彦 前掲書(13) 二二〇・二二二頁。

	2	2	2
	5	4	3

『大田南畝全集』第十九卷、一一八、一一九頁。
 浜田義一郎 前掲書(2)二〇四、二〇九頁。
 「細推物理」(『大田南畝全集』第八卷)三三九、四〇四頁。
 浜田義一郎 前掲書(2)一七一頁。
 沓掛良彦 前掲書(13)一八三頁。

第二節 大田南畝に関する先行研究

本論文での着目は寛政期に南畝は狂歌会との関係を絶っていたかどうかである。

南畝研究の権威である浜田義一郎氏は「南畝は文芸活動を停止し、狂歌界と絶縁した。また再び狂歌を作ったけれども、狂歌界にはまったく関係しなかった」¹としている。

野口武彦氏は「手際よく狂歌仲間と絶縁して、家に籠もって自重していた」²、とし「すばやく幕府の能吏へ転身し」³としている。

黒田政広氏は「江戸戯作者による往来本執筆活動」⁴で、戯作の教訓的性格について考察し、そこから往来本普及の重要な要因として、戯作者が往来本執筆に至った経緯について明らかにしている。

江戸戯作は寛政改革の弾圧、出版統制によって遊戯的で風刺に満ちた表現中心の作風から、教育的な性格をもち、末期の戯作の題材と表現上からは勸善懲惡的なニュアンスがみられ、作品自体が多少の教訓的性格をもつようになったという。

また、寺子屋などの増加によって往来本を無視できなくなり、書肆が戯作者に往来本の執筆を依頼し、原稿料を受け取るようになった戯作者も、収入を期待して往来本を執筆したという。また、出版統制が作者に対するよりも書肆に対する取締りであったとしている。そして、外的要因だけでなく内的要因も関係したと指摘している。

そして、洒落やうがちの見られない真面目な物語的作風は長編化の一途を辿り、合巻へと発展していったという。洒落本に見られた会話文によって写實的に描写するという方法のみは、時事風刺的性格を失った十返舎一九らの滑稽本となって受け継がれたとしている。

石川了氏は、「談義本の諷刺や暴露の滑稽は、明和安永期（一七六四〜八一）から笑い提供の柱となる洒落本と黄表紙に、それぞれ半可通暴露や時事的題材の茶化しとして継承されたが、寛政改革を機に、洒落本は遊里での

恋の実情を描く方向へ、黄表紙は教訓や筋の展開を主とする方向へと変質しともに笑いを失う」⁵としている。揖斐高氏は「定信は田沼政権の経済政策を否定し、質実儉約を旨とする経済運営へと転じたため、貨幣の流通が悪くなった江戸の町は不景気に見舞われ、遊里や芝居は活気を失った。また、黄表紙や洒落本の内容にも改革政治の干渉が及んだため、戯作は自由闊達さを失って教訓性へ傾くなど変質を余儀なくされることになった」⁶とした上で、「田沼政治の終焉によって、時代の上げ潮に乗るような形で展開してきた、南畝の文学活動の基盤は一挙に崩れ去った」という。

さらに、死罪になった勘定組頭の土山宗次郎との関わりや、「世の中に蚊ほどうるさきものはなしぶんどいふて夜もねられず」の作者といわれことによって、「身の危険を感じるようになったとしても不思議ではない。南畝は戯作を止め、狂歌界とも絶縁し、自宅に逼塞して難を逃れた」⁷としている。

その上で、揖斐氏は「もともと南畝の狂歌・戯作への進出は時代の流れに押されたものであり、南畝にとって幕臣であることと引き換え得るようなものではなかった」⁸と指摘している。

小林ふみ子氏は『天明狂歌研究』で、もつとも流行した天明期の狂歌に焦点を当て、天明狂歌の特徴や出版の変化、また、狂歌師の中心的人物である大田南畝と狂歌の関わりについて述べている。

狂名の性格や意義について、虚構性はある程度見出せるが、狂名と作者の実体との区別が曖昧になるとし、画一性については作品などが作者の実体に密着した点もあり否定している。匿名性はなくなり、それゆえに天明狂歌の盛り上がりがあったとしている¹⁰。また、天明狂歌の趣味的なところに、商業的な要素が持ち込まれたことによる活動の変化について述べられている。それによって個人の配り物から連の中での出版物に変化し、さらにはその後の摺物出版人気に変化したことも示されている¹¹。

野口氏も同様に、狂歌や狂詩について作品でみせる「内面の顔が南畝の本当の人格であるとは必ずしもいえない。外に向けていた面貌は、決して随時自在に着脱できる仮面ではなかった。(中略)南畝にあって人格と面貌と

仮面は一つに血肉でつながり、おそらく当人自身にも分ちがたく、正体不明のまま多重に複合していた」¹²と
している。

小林氏は大田南畝の狂歌・狂詩などを中心に特徴や意義についても述べている中で、寛政期において南畝は完全
に狂歌を絶っていたわけではないとしている¹³。「よみ人しらず」とするなど匿名を使って狂歌をつくってい
たと主張し、その筆跡が南畝と同じであるという¹⁴。

小林氏によると天明期に活気に満ちた要因は、天明狂歌の明るさ、おもしろさが人々を惹きつけたのに加え、
多様な在り方が共感を呼び、参加を促したとしている。その狂歌を牽引していた大田南畝にとって寛政期は空白
の時期ではなく、密かに狂歌をつくり、言語の可能性の意味を見つめなおし、再認識した時期と位置づけている¹⁵。

私は小林氏と同じく寛政期に南畝は狂歌をつくることをやめなかったと考える。浜田義一郎氏をはじめこれま
での通説では、狂歌仲間との関わりを絶ち狂歌をつくらなかったとされるが、寛政期においても南畝はこれまで
同様の交友関係をもっている。花見や宴、詩会などもこれまでと同じく行い、酒を携えての交流が多いことが窺
える。天明期のような表立った狂歌会こそ開催したり、参加はしていないが、親しい間柄ではこれまで同様に狂
歌をつくっていたと考えられる。

註

1 浜田義一郎『大田南畝』一三七頁。

2 野口武彦『蜀山残雨』一四二頁。

3 野口武彦「大田南畝の『転向』」(『江戸文学の詩と真実』中央公論新社、一九六七年)。

4 黒田政広「江戸戯作者による往来本執筆活動―幕府出版統制策との関連から―」(『作陽音楽大学・短期大学

- 研究紀要』第二七卷一号、一九九四年）五五頁。
- 5 大曾根章介・久保田淳・檜谷昭彦・堀内秀晃・三木紀人・山口明穂編『研究資料日本古典文学』第四卷 近世小説、一九八三年、明治書院、三三三頁。
- 6 太田記念美術館編『蜀山人 大田南畝―大江戸マルチ文化人交遊録―』太田記念美術館、二〇〇八年、一〇一―一頁。
- 7 同右書、一一頁。
- 8 右に同じ。
- 9 小林ふみ子『天明狂歌研究』三〇頁。
- 10 同右書、二二頁。
- 11 同右書、一〇八頁。
- 12 野口武彦 前掲書（2）一七頁。
- 13 小林ふみ子 前掲書（9）二〇一頁。
- 14 同右書、一九一、一九五頁。
- 15 同右書、二〇一、二〇二頁。

第二章 出版統制令と南畝

第一節 出版統制令

田沼意次が権勢をふるっていた頃は、江戸庶民の遊芸参加や余暇活動が展開されるようになり、出版においても盛んで葛屋重三郎などが現れるなど画期的な発展をしたときであった¹。また、黄表紙、洒落本などが最も盛んにつくられたときでもあった。

そもそも黄表紙とは滑稽な挿絵小説で、安永四年（一七七五）に恋川春町が書いた『金々先生栄花夢』に始まり、文化三年（一八〇三）までの間に二〇〇〇種以上が出版されたという²。代表的な作者は恋川春町、朋誠堂喜三二、山東京伝などがおり、南畝も数は多くはないものの黄表紙を出版している。

洒落本とは遊里を題材とした短編風俗小説で、遊里での「通」が書かれている。山東京伝、万象亭、南畝らが代表的な作者であった³。

そのような時代のなか天明六年（一七八六）に田沼意次は老中を罷免され、翌天明七年に白河藩主であった松平定信が老中首座に就いた。定信はそれまでの田沼政治から一新して寛政の改革を行っていった。寛政の改革の主な政策をみていくと、寛政元年（一七八九）九月に札差棄捐令、寛政二年二月に人足寄席場の設置、同年五月に異学の禁と出版統制令、十一月に旧里帰農推奨令、寛政三年十二月に七分積立金令が出されたのである⁴。

ここでは寛政の改革の一環で出された出版統制に視点を置いてみていくことにする。定信によって出されたその出版統制について、同年五月に出された「町触」の内容は以下の通りである。

書物草紙之類、新規ニ仕立候儀無用、但不叶事ニ候ハ、相伺候上可申付候、尤當分之儀早速一枚繪等ニ令

板行商賣可爲無用候、右之品々有來物ニても、最初は其仕方之品輕候ても、段々仕方を替、花美を画し、潤色を加へ、甚費成儀ニ成候間、最初之質朴を用候様可致候、且新板書物其筋一通之事は格別、猥成儀異説を取交作り出候儀、堅可爲無用候、只今迄有來候板行物之内、好色本之類は、風俗之爲ニもよろしからざるニ付、段々相改、絶板可致、又は書物ニよらす、以後新板之物作者并板元之實名奥書ニ致可申旨、其外品々享保年中相觸候處、いつとなく相ゆるミ、無用之書物作出、令板行、并子供持遊草紙繪本類ニ至迄、年々無無益ニ手を込メ、高直ニ仕立、其費成事ニ候間、前々相觸通彌相守、猶又左之趣ニ可相心得候、

一、書物類古來より有來通ニて事済候間、自今新規ニ作出申間敷候、若無拋儀ニ候ハ、奉行所え相伺、可受差図候、

一、近年子供持遊ひ草紙繪本等、古代之事ニよそへ、不束成儀作出候類相見候、以來無用ニ可致候、

一、浮説之儀、仮名書写本等ニ致し、見料を取、貸出候儀致間敷候、

但、淨瑠理本は制外之事、

一、都て作者不知書物類有之は、商売致間敷候、

右之通ニ候間、以來書物屋共相互ニ吟味いたし、觸ニ有之品隱候て賣買いたし候もの有之は、早速奉行所え可申出候、若見通し、聞通しニ致置候ハ、當人は勿論、仲間之もの迄も咎可申付候、制禁之書物類、若國々より差越候儀も有之は、是又奉行所え申出、可請差圖候、⁵

この町触の中で出版について、時事的な事柄の著作板行の禁止、「猥成儀異説」の著作板行の禁止、「好色本之類」の絶版、奥書には作者や板元の実名を書くことを定め、さらに四カ条を挙げており、第一では書籍類の新し著作出版を禁止し、もし仕立てる場合は奉行所の指示を受けることとされ、第二では古い時代に仮託して政治風刺をする黄表紙の類を禁止しており、第三では政治批判や暴露を内容とする写本類の貸本を禁止し、第四では

作者のわからない書物の商売を禁止している。特に政治批判といった言論を抑えることを目的としていたことがわかる。

また幕府は同年九月にも再度出版についての触書を出している。

書物類之儀、前々より嚴重に申渡候処、いつとなく猥りニ相成候、何ニよらず行事改之繪本草双紙之類迄も、風俗之為ニ不相成、猥りかはしき事等勿論無用ニ候、一枚絵之類は、画のミニ候ハ、大概は不苦候、尤言葉書等有之候ハ、能々改之、いかゝなる品々は板行ニいたさせ申間敷候、右ニ付、行事之改を不用もの候ハ、早々可訴候、又改方不行届か、或は改ニ洩候儀候ハ、行事も越度たるへく候、

右之通相心得可申候、尤享保年中申渡置候趣も、猶又書付候て相渡候間、此度申渡候儀等相含、改可申候、⁷ここでは、「行事」つまり出版会の責任者が許可した絵本草双紙の類でも「風俗之為ニ不相成、猥りかはしき」ものは禁止している。従って洒落本の類もここで禁止されたのである。

さらに同年十一月には、

書物之儀、毎々より嚴重ニ申渡置候処、いつとなく猥りニ相成候ニ付、此度書物問屋并一枚絵草紙問屋共江改之儀申渡、且一枚絵草紙問屋共ハ、是迄行事無之ニ付、以来兩人ツ、行事相立候様申渡置候処、右書物屋共之外ニ、貸本屋世利本屋と唱、書物類商売致し候者有之、一枚絵草紙問屋之外ニも同様之商売致し候者有之趣候間、前書物屋共絵草紙屋共江、此度申渡候趣相心得、以来新板之書物同新草双紙一枚絵之類取扱候節、書物屋并草双紙屋之内、行事共江其品差出之儀堅致間敷、若相背候者有之候ハ、急度申付候事、⁸

と触書を出し、貸本屋、世利本屋など、書物問屋や地本問屋仲間以外での出版を禁止した。

短期間の間にいくつもの出版物を統制する触書を出しているところからみても、定信をはじめ幕府は、出版統制を徹底したかったことが窺える。

次の四つの作品は実際に絶版処分されたものである。

作品	年	作者	備考
『文武二道万石通』	天明八年	朋誠堂喜三二	秋田藩留守居役 平沢常富
『鸚鵡返文武二道』	寛政元年	恋川春町	駿河小島藩江戸詰家臣 倉橋格
『天下一面鏡梅鉢』	寛政元年	唐来参和	高家衆元家臣 加藤氏 (幕臣鈴木庄之助の説あり)
『世直大明神 金塚之由來』	寛政元年	石部琴好	幕府御用達商人 松崎仙右衛門

これらの作品の作者たちはいずれも武士や幕府に関わりのある者であったことから、この弾圧は出版統制の一面だけでなく、内政立て直しにおける「みせしめ」の要素があったとされる。

出版統制令が出された寛政二年から遡ること二年前の天明八年に、朋誠堂喜三二の『文武二道万石通』、恋川春町の『悦胤眞蝦夷押領』、蘭徳齋春童の『やれ出た 亀子出世』、山東京伝の『徳門 時代世話二挺鼓』、『仁田 富士之人穴見物』などが出され、寛政元年には、唐来参和の『天下一面鏡梅鉢』、恋川春町の『鸚鵡返文武二道』、石部琴好の『世直 黒白水鏡』、山東京伝の『孔子縞于時藍染』、『飛騨 奇事中洲話』、和歌林泉の『世之中承知重忠』などが刊行された。これらは政治的な事柄を取り上げ風刺したものであった¹⁰。社会風刺において、牽引していたのが下級の役人や藩士たちであった。

それらの作品がどのような内容であったのか、『文武二道万石通』からみていく。

舞台は鎌倉時代で、源頼朝が、大名、小名のうち、文武両道を兼ね備えた者はどれくらいいるのか重臣の畠山重忠に命じる。まず、文雅の士と武勇の士と、そのどちらでもない「ぬらくら武士」と富士の人穴に入ること

ふるいわけをし、さらに、その「ぬらくら武士」を箱根の七湯での遊興から文と武の二道に導くというものである¹¹。

当時の人が読めば、随所に当時の政治や社会の動向が、洒落や穿ちと読み取れる文句で書かれており、画も鎌倉時代ではなく江戸時代当時の社会風俗を丁寧に描いている。

天明八年は白河藩主松平定信が老中に就任し、寛政改革を開始した翌年である。定信は、就任して早々に大名・旗本らに対して文武を推奨した¹²。これは定信が文武を奨励したという事実に基づき作られた黄表紙であった¹³。

話に登場する源頼朝は十一代將軍徳川家斉を指し、畠山重忠は松平定信を表している。重忠の袴には、白河松平家の家紋である梅鉢の紋が描かれている。また、「ぬらくら武士」のなかに、七ツ星の紋を袴を着た人物がおり、七曜星の家紋の田沼意次を暗示しているほか、勘定奉行であった赤井豊前守や松本伊豆守、勘定組頭であった土山宗次郎、御側申次役であった横田筑後守ら田沼派に属していた面々が、「ぬらくら武士」として笑いものにされている。

『文武二道万石通』は、松平定信新政権による寛政改革の文武推奨策を穿った作品であり、田沼意次ら前政権の主要人物を茶化した作品であった¹⁴。これは当時の読者にはすぐにはわかったことであったと考えられる。

朋誠堂喜三二の『文武二道万石通』は寛政改革の文武奨励を、恋川春町の『悦鬘眞蝦夷押領』は田沼意次の蝦夷地開発を風刺し、『鸚鵡返文武二道』は文武奨励や儉約令を揶揄している。政治風刺の内容のものが多くの人たちに読まれていたために、幕府は寛政二年（一七九〇）に出版統制令を出し、特に社会風刺において圧力をかけることになった。

それに触れる出版物を絶版処分にし、作者や出版者も処罰された。恋川春町は幕府からの呼び出しを拒んでいる間に死亡しており、山東京伝は手鎖五〇日に処され、版元の蔦屋重三郎は財産の半分を没収されたりしている

15。山東京伝や版元の蔦屋重三郎を矢面にしたのは、知名度の高さも加わり、最も効果的な「みせしめ」であったとされる¹⁶。

戯作者らは出版統制によって罰せられたり、作風の転換を余儀なくされたりした¹⁷なかで、南畝は寛政期には狂歌界から離れ、幕臣としての勤めに専念したとされている¹⁸。

しかし、前章で述べたように小林氏は、南畝はこっそりと狂歌をつくり、また、よみひとしらずとして南畝が狂歌を読んでいたとしている¹⁹。その裏づけとして、よみひとしらずの筆跡と南畝の筆跡が酷似していることを挙げている²⁰。筆者も南畝の狂歌との絶縁に関しては異を唱え、その根拠となるところは次節から論じていく。

いずれにせよ南畝にとつては、この出版統制令が一つの人生の岐路であったことは間違いない。前章で取り上げた土山の一件と、この出版統制令によって、これまで幕臣としての働きよりも狂歌師として名を上げてきた南畝は、幕臣としての務めに主を置くことになる。さらには多くの戯作者たちにも出版統制令が大きな影響を与えたことは述べたとおりである。

さて、出版統制が行われたことで、決してこれらの出版物がみられなくなったわけではなかった。出版物を支えたものとして貸本屋の存在があったからである。当時の貸本屋は店に客が来るのを待つ形態ではなく、店を構えないで行商を行う形で活動するものであった²¹。文化五年（一八〇八）には六五六人の貸本屋が活動していたという²²。その点からも利用する人たちが非常に多かったことがわかる。貸本屋は出版された本を貸すだけでなく、出版されていない写本類も貸し出しており、この写本の中には、先ほど挙げた出版統制で絶版となったものも多くあった²³。よって、ひそかに絶版された本を人々は読んで楽しんでいたりとみられる。これらの様子について今田洋三氏は、「幕府の出版統制の強化を背景として、かえって権力に対抗する性格を強めたのである。彼らの活動で、出版取締令の禁止事項は骨抜きにされている面もあった。封建的抑圧の中で、しぶとく活動した貸本屋のような、コミュニケーターの存在があつてこそ、庶民レベルにおける社会的コミュニケーションが確保された」

24と指摘している。当時の人たちにとって出版物は社会とのかかわりをもつ手段でもあり、楽しみの一つでもあったことがわかる。そのために人々は積極的に出版物との関わりをもとうとしたと考えられる。そこから考えても、南畝の狂歌をはじめとする作品がでてこないことは江戸の町人たちは知っており、南畝の作品を待望する人々のあいだから、「世の中に蚊ほどうるさきものはなしぶんぶといふて夜もねられず」という一首が誕生し、広まっていったとも考えられる。

また、「高き名のひゞきは四方にわき出でて赤良く」と子どもまでしる」とあるように、広く南畝こと四方赤良が知られるようになった一端をこの貸本屋たちが担っていたと考える。

註

- 1 竹内誠『江戸と大坂』（大系日本の歴史10、小学館、一九八九年）二五五頁。
- 2 今田洋三『江戸の本屋さん』、日本放送出版協会、一九七七年、一九〇、一九一頁。
- 3 竹内誠 前掲書（1）二四八、二五〇頁。
- 4 同右書、二五〇頁。
- 5 竹内誠『寛政改革の研究』吉川弘文館、二〇〇九年、一一七頁。
- 6 高柳眞三他編『御触書天保集成 下』岩波書店、一九四一年、八〇九、八一〇頁。
- 7 上保国良「寛政の改革と山東京伝」（日本大学史学会『史叢』三十一号）三六頁。
- 8 高柳他編 前掲書（5）、八一〇頁。
- 9 石井良助 編『徳川禁令考』前集第五、創文社、一九七八年、二五二、二五三頁。
- 10 上保 前掲論文（6）三三三頁。
- 11 竹内 前掲書（4）一〇四、一〇五頁。
- 12 大曾根章介 他編『研究資料日本古典文学』第四卷 近世小説、明治書院、一九八三年、三三三頁。
- 13 竹内 前掲書（4）一一四頁。

- 1 3 大曾根他編 前掲書(11) 三三一頁。
 1 4 竹内 前掲書(4)に同じ。
 1 5 野口武彦『蜀山残雨』一四八頁。
 1 6 上保 前掲論文(6) 三九頁。
 1 7 黒田政広『江戸戯作者による往来本執筆活動―幕府出版統制策との関連から―』(作陽学園学術研究会『作陽
 音楽大学・短期大学研究紀要』第二七卷一号、一九九四年) 五五頁。
 1 8 ○五、二〇〇六年) 九五、一〇一頁。
 1 8 浜田義一郎『大田南畝』吉川弘文館、一九六三年。
 杳掛良彦『大田南畝』ミネルヴァ書房、二〇〇七年。
 野口武彦『蜀山残雨』新潮社、二〇〇三年。
 野口武彦『大田南畝の『転向』』(『江戸文学の詩と真実』中央公論新社、一九六七年) など。
 1 9 小林ふみ子『天明狂歌研究』一九〇頁、一九五頁。
 2 0 同右書、一九四、一九五頁。
 2 1 竹内誠 前掲書(1) 三五三頁。
 2 2 今田 前掲書(1) 一五二頁。
 2 3 同右書、一五七頁。
 2 4 同右書、一六〇、一六一頁。

第二節 出版物の変化

南畝は狂詩、狂歌を好んでよく詠み、狂詩集、狂歌集として刊行していた。

そもそも狂詩は、野口氏の言葉借りれば「漢詩のパロディー」¹である。狂詩の原則は次のとおりである²。

- ① 狂詩は俗語を用いるので平仄は不要である。
- ② 絶句や律の詩律に従い原則通り押韻する。
- ③ 詩律の場合は、三句と四句、五句と六句にそれぞれ対句を用いる。
- ④ 用字には、熟字、世話字、俗字などを適宜いかして用いる。

また、狂歌とは狂体の和歌であり、和歌の内容に滑稽な内容を盛ったものである³。その狂歌は鎌倉時代初期頃から歌会や連歌会の余興として行われ、室町末期から江戸時代初期にかけては上層階級の間で流行した遊戯的文学である。その後、次第に庶民の間にも広まっていったのである。滑稽、諧謔を読みこんだ和歌といわれることも多い。正統や雅でないものを三一文字の伝統的形式の中に詠みこんで、滑稽感や諧謔を表現した⁴。また、狂歌は「言い捨て」という原則があり、その場に詠み捨てるものとされていた⁵。すなわち、狂詩が漢詩のパロディーならば、狂歌は和歌のパロディーといえる。

南畝は狂詩や狂歌だけにとどまらず黄表紙、洒落本、噺本などの刊行物も積極的に出している。

ここでは、南畝が出版したものに焦点を当て、そこから南畝の動向の変化をみていく。
では、南畝はいつ、どのような作品を出版していたのか。

南畝は安永から天明期にかけて、盛んに洒落本、咄本、黄表紙や狂歌集、狂詩集を出版していることが別掲表1からわかる。特に安永七年（一七七八）から天明二年（一七八二）にかけては咄本や洒落本を中心に出版し、また天明三年から天明七年は黄表紙や狂歌集を中心に出版している。

安永四年（一七七五）に南畝は風鈴山人の号で、新宿を舞台にした洒落本の第一作『甲駅新話』を出版した。続いて山手馬鹿人という号で深川などを舞台にした『世説新語茶』、安永八年には同じく山手馬鹿人の号で深川を舞台にした『深川新話』や『粋町甲圍』、続いて安永九年には南楼坊路銭の号で品川を舞台にした『南客先生文集』や姥捨山人の号で中山道の宿場である軽井沢を舞台にした『軽井茶話道中粋語録』など洒落本の出版をした⁶。天明期に入ると黄表紙の出版がみられるようになる。天明元年（一七八一）には黄表紙評判記『菊寿草』を出版し、天明二年には同年の黄表紙四十六部を批評した『岡目八目』を出版した。掛斐高氏は南畝を「黄表紙という新興戯作の交通整理をした」⁷と指摘する。天明四年には四方山人の名で『舞原二度の賭（源平総勘定）』、『漢体此奴和こいつはにほん日本（寿塩商婚礼）』、『頭てん天口有』、『返々目出鯛春参』、『小野之助拳角力』などを出版した⁸。咄本は安永七年の『春笑一刻』に始まり、天明二年までに七作品を出版している。鈴木俊幸氏は「これまでほとんど、作名は一回限りの使い捨てであつて、各品や作風を指標するものとはなりえなかつたが、山手馬鹿人や朱楽館主人、また田螺金魚や蓬萊人帰橋といった固定した作名の下に続作し、それぞれ特色ある作風を展開する作者が出てくる」⁹と指摘する。

この時期の南畝の戯作進出の背景について、浜田義一郎氏は貧窮な下級幕臣大田南畝の小遣い稼ぎという理由を見出し¹⁰、中野三敏氏は戯作することは精神の解放であり、「新しさ」の追及¹¹という理由を見出している。筆者は南畝の交友関係に端を発すると考える。南畝は当時有名であった戯作者である風来山人こと平賀源内とも関わりがあつた。南畝は源内に自らが執筆した『水懸論』をみせ賞賛されたという¹²。さらに南畝最初の戯作である『寝惚先生文集』の序文を源内が寄せている¹³。このことから、南畝は源内の影響を大きく受けたと考えられる。これがきっかけとなり洒落本、黄表紙をその後盛んに出すようになったと考えられる。

黄表紙や洒落本の作者らは狂歌との関わりもがあつた。次に挙げるのはその一例である。

戯作者名

狂名

山手馬鹿人……………四方赤良
 恋川春町……………酒上不埒
 朋誠堂喜三二……………手柄岡持
 南陀伽紫蘭……………一筋千杖
 奈蒔野馬鹿人……………筆の綾丸
 山東京伝……………身軽折介
 森羅万象……………竹杖為軽
 唐来参和……………質草少々
 吉見義方……………紀定丸
 恋川好町……………鹿津部真顔
 蓬萊山人帰橋……………大の鈍金無

このように黄表紙などの作者でありながら狂歌師という一面をもつ者が多く存在し、南畝もまたその一人であったことがわかる。南畝が黄表紙などを出版した背景には、版元である葛屋重三郎の存在も大きく関わっていたと考えられる。(葛屋が黄表紙の版元で、南畝の版元も葛屋だった)。「葛屋は狂歌の仲間として狂歌師・戯作者たちの中に立ち交り、彼らの戯れの産物を発行していく」¹⁴と鈴木俊幸氏が論じていることから明らかである。また、南畝の狂歌仲間である富田屋新兵衛(狂名・文屋安雄)や奈良屋清吉(狂名・普栗釣方)が黄表紙や洒落本の刊行に関わり、それら戯作の作成に狂歌仲間の南畝や菅江を中心とする者たちが群れをなして興じ始めたこと指摘している¹⁵。やはり、版元との関わりが背景にあり、特に版元自身も狂歌を詠み南畝と狂歌仲間であることが大きいことが最大の要因であるといえる。

南畝は黄表紙などを刊行する一方、狂歌界をリードする中心的存在になっていた。

狂歌会は、集つて虚構の人格を演じる狂歌の遊び¹⁶の場であり、武士・町人などの身分を問わないところであった¹⁷。

そのため、狂歌会には武士や町人といった身分の壁を越えて多くの狂歌師が集まった。南畝はそのなかで大名や同じ幕臣、学者、町人などといった人たちとつながりをもつていった。そのなかで勘定組頭の土山宗次郎（狂名・軽少ならん）とも交友関係を深めていったと考えられる。

そのようななかで南畝にはどのような変化がみられたのであろうか。

前節でみたように最初に出版統制の町触が出されたのが寛政二年（一七九〇）五月のことである。この頃から南畝の出版はほとんどなくなっていることが別掲表1からわかる。

これまでの戯作者としての活動よりも、幕臣としての動きが表立ってみえてくることは前節で述べた。また、別掲表1からもわかるように狂歌集や戯作中心だったのに対し、寛政二年以降は日記が主になってくる。やはり南畝は出版統制令の影響を直に受けた一人であることには相違ない。

出版統制令によって表立って狂歌などを詠むことを慎んでいた南畝であるが、文化十四年（一八一七）になって再び南畝が狂歌を始めたことが別掲表1から窺える。文化十四年には寛政二年に出された出版統制令は遠い過去のことになり、南畝が狂歌を詠むことに何ら影響はないと考えられる。

この点から表立って南畝が戯作や狂歌などを作ることをやめたと考えられる。ここで強調したいことは表立った活動をやめたことであり、決して絶縁したわけではないことである。先ほどから「表立って」と繰り返す述べたが、これには理由がある。

まず、出版統制令が出されたのは寛政二年五月であるが、狂歌界と絶縁したといわれているのは天明七年（一七八七）のことだからである。また寛政二年七月に『二大家風雅』が刊行されていることが挙げられる。これは畠中頼母との共著であり京都で出版された。江戸での出版は憚られ、共著ということもあり、畠中頼母のいる京

都で頼母が主となって刊行したと考えられる。

次に注目すべきは、天明八年（一七八八）に『四方のあか』『画本虫撰』が出版されていることが挙げられる。『四方のあか』では南畝は自らが書いたにも関わらず、宿屋飯盛が書いたように装っている¹⁸。この点からみて公に名前を出しての刊行は憚られたと考えられる。『画本虫撰』は天明七年に行われた虫聞きの狂歌会が行われ、翌天明八年に刊行されたものである¹⁹。

また、寛政元年（一七八九）には朱楽菅江編『潮干のつと』²⁰に南畝が狂歌を寄せている。

『潮干のつと』は、三十六の歌仙貝を詠み込んだ狂歌を集めた狂歌絵本である。朱楽菅江を中心とする朱楽連のメンバーが狂歌を寄せている。見開きの画面の上半分に狂歌を配し、下半分にその狂歌に対応する貝の絵が喜多川歌麿によつて描かれている。南畝は「香爐峯雪にもまさる 白砂をかゝげて やみむたますだれ貝 四方赤良」の狂歌を寄せている²¹。

さらに、南畝は天明八年に「夷曲十二首」を書いている。その中の一首に、

調馬場

文を右武をも左のもろ手繩とれるは道のつぼうまばかな²²

とあり、さらにその前文として書かれた「稲雲園記」には、「文を右にし武を左にすてふめでたき御代にしあれば」²³とあることから、定信による文武奨励に関した狂歌であると考えられる。

「夷曲十二首」とともに「稲雲園記」も書かれていることは、「南畝集」の中に「山木氏陸田別業十二詠」²⁴とあり、「稲雲園」と題した漢詩があることから、このときに南畝は狂歌を詠んでいたことがわかる。

以上の点からも南畝は狂歌を詠んでいたことが明らかであり、絶縁したとは言いがたい。南畝は天明七年に狂

歌界と絶縁したといわれてきたが、それ以降も狂歌・狂詩との関わりをもっていたと考えられる。実際にこの時期南畝が詠んだと思われる狂歌が少ないのは、土山宗次郎の一件、出版統制令が相重なったため表立った活動ができなかったことから、狂歌の原則である、その場に詠み捨てる、ということを忠実に行ったためであると考えられる。そのためあたかも以前とは異なって狂歌を詠まなくなったようにみえるのではないかと考える。

註

- 1 野口武彦『蜀山残雨』六七頁。
 - 2 市古貞次編『日本文学全史』4 近世、学燈社、一九七九年、三〇七頁。
 - 3 同右書、四五四頁。
 - 4 浜田義一郎『大田南畝』二八頁。
 - 5 日野龍夫「南畝の漢詩文（一）」（『大田南畝全集』第三卷）五三七、五三八頁。
 - 6 浜田義一郎「南畝の狂歌・狂文」（『大田南畝全集』第一卷解説）五二七、五二八頁。
 - 7 『大田南畝全集』第七卷にそれぞれ収められている。
 - 8 揖斐高「蜀山人大田南畝―虚・実・雅・俗の多面体―」（『蜀山人 大田南畝―大江戸マルチ文化人交遊録―』十頁）。
 - 9 『大田南畝全集』第七卷にそれぞれ収められている。
 - 0 鈴木俊幸「陽のあたる戯作―蔦屋重三郎の戯作出版をめぐる―」（『雅俗の会『雅俗』四号、一九九七年）一七頁。
 - 1 浜田義一郎『大田南畝』四九頁。
 - 1 中野三敏「南畝の戯作」（『大田南畝全集』第七卷解説）五〇四頁。
 - 2 浜田 前掲書（10）二二頁。
 - 3 浜田 前掲書（10）二二、二二二頁。
- 「寝惚先生文集」（『大田南畝全集』第一卷）三四一頁。

- 鈴木 前掲論文(9) 二七頁。
- 同右書、一五、一七頁。
- 小林ふみ子 『天明狂歌研究』 二二頁。
- 沓掛良彦 『大田南畝』 七八頁。
- 揖斐高 前掲書(7) 十頁。
- 「四方のあか」(『大田南畝全集』第一卷) 一〇七頁
- 小林ふみ子 前掲書(16) 一七五頁。
- 小林ふみ子 前掲書(16) 一八七頁。
- 太田記念美術館 『蜀山人 大田南畝—大江戸マルチ文化人交遊録—』に図版掲載(出品番号53)。
- 同右書、一二六頁、出品番号53。
- 『大田南畝全集』第十八卷、六〇五頁。
- 同右書、六〇四頁。
- 「南畝集」(『大田南畝全集』第三卷) 四九二頁。

第三節 南畝の交友関係

狂歌会とは鈴木俊幸氏によれば「交遊の場として安永末年よりますます盛んに」なり「会的な組織としての機能を高めていく。様々な分野の才子たちがそこに群れ集い、様々な分野の作り手が交錯する。黄表紙と洒落本と、両方で才能の徒花を咲かせるものが多くなってくる」という。

南畝はまさにその真つ只中にいて、交友の幅をきかせていった。南畝の交友関係の広さは『大田南畝全集』全二十巻からも明らかである。狂歌界の中心的人物であることから、その人脈は毛利蘭齊（狂名・海廻屋真門）といった大名から幕臣、藩士、学者そして町人に至るまで幅広い関わりをもっていた²。そもそもこの交友の広さをもった起因は、内山賀邸に師事したことにはじまったと考える。この内山賀邸は、牛込加賀町にて国学を教える一方で、自ら狂歌を詠み、門弟にも教えていた³。門弟のなかには、久世丹後守広民、川井越前守久敬などの旗本や、岡田寒泉、唐衣橋州、朱楽菅江などの御家人、煙草屋を営む町人の平秩東作などがいた⁴。また平賀源内とも親しく『寝惚先生文集』の序を源内が書き、源内の獄死後に遺文集『飛花落葉』を出版するほどであった。南畝が二十歳のときに牛門四友と称するグループを、菊池衡岳、岡部四溟、大森見昌らと結成し『牛門四友集』を出版した⁵。

さて、狂歌界において中心的役割を果たしたのが内山賀邸一門であり、さらには、最初の狂歌会を開いたのは唐衣橋洲であった。それがわかる南畝の記述がある。

江戸にて狂歌の会といふものを始めてせしは、四ツ谷忍原横町に住める小嶋橋洲なり源之助と称す。田安府の十人也。、其とき会せしもの、わづかに四五人なりき、大根太木山田屋半右衛門といへる町人。辻番請負なり。、馬蹄後に飛塵の馬蹄と号す。田安府の七也。、大屋裏住金吹町の大

萩屋と、東作四谷内藤宿の煙草屋なり。稲毛屋・四方赤良等なり予はじめは赤人といひしが後に赤良に改む其後大根太木、きり金を請とりに市令の腰掛にあ

りて、かたへに湖月抄を読むえせものありしを尋ねれば、大野屋喜三郎といへるものにて、京橋北紺屋町の湯屋なり。是もとの木あみ子也。此妻もまた狂歌をたしなみて智恵の内子といへり。それより四方赤良を尋ね来り、太木、もくあみともないて橘洲をとひしなり⁶。

橘洲宅での狂歌会の初めは明和六年（一七六九）といわれる⁷。その翌明和七年には明和十五番狂歌合が開かれる。判者に内山賀邸と萩原宗固を迎え、作者は唐衣橘洲・平秩東作・四方赤良・秀安・坡柳・元木網の六人であつた⁸。また安永三年（一七七四）には牛込にある恵光寺で宝合の会を開いた。宝合には、早鞆はやとものめかり和布刈わふかりこと堀保己一、和気春画わけのはるえこと小松屋百亀、酒上熟寝さけのうえのじゆくれこと島田左内、古金見倒ふるかねみたおしこと渡瀬庄兵衛、大根太木こと松本熊長、文屋安雄こと富田屋新兵衛のほか九人が出席した⁹。

橘洲の狂歌会、狂歌合、宝合に出席した人物を武士、町人に分けて示せば次のようになる。

武士：唐衣橘洲・四方赤良、馬蹄、内山賀邸、萩原宗固、塙保己一、朱楽菅江

町人：大根太木（辻番請負）、大屋裏住（大家）、平秩東作（煙草屋）、元木網（湯屋）、智恵内子（木網の妻）、

秀安（医師）、小松屋百亀（薬屋）、島田左内（名主）、渡瀬庄兵衛（名主）、富田屋新兵衛（本屋）

不明：坡柳

ここから、狂歌は町人たちの間でも盛んに詠まれ、武士と町人の隔てがないことが窺える。

次に「南畝集」¹⁰から南畝の交友関係のわかる記述の数例を取り上げる（読み下しは『大田南畝全集』にかかれてあるものを全面的に参考にした）。

天明四年（一七八四）には、

夏日同広子純井子静春葦仲井子瓊原士立弟栄名甥義方泛舟

仙侶来相命 牛門早放舟 柳堤斜罷霧 茗水曲通流 豈是一時暑 將銷千古憂 飄飄心不繫 到処逐輕鷗

〔夏日、広子純・井子静・春葦仲・井子瓊・原士立・弟栄名・甥義方と同じく舟を泛ぶ〕

仙侶来たりて相命じ 牛門早く舟を放つ 柳堤斜めにして霧を罷き 茗水曲りて流れを通ず 豈に是れ一時の暑ならんや 將に千古の憂へを銷さんとす 飄飄として心繋がず 到る処輕鷗を逐ふ¹¹

とあり、春葦仲こと春日部錦江、同じ御徒の井上子瓊、弟の金次郎、甥の吉見義方の名前が挙がっている。天明五年（一七八五）には、

春日肥前文学石井仲車邀宴馬景德松琴楼同雲藩荻野求之薩州世子侍読赤崎彦礼藝州文学頼千秋及堀口孟一
爽鳩子允井子瓊鈴猶人賦

十二街中麴米春 高楼盃酒会城圍 遅々日色含雲霧 稷々松風絶世塵 久廢揮毫甘一醉 偶因傾蓋得相親 此時邂逅論心客 尽是朱門席上珍

〔春日、肥前文学石井仲車、邀へて馬景德の松琴楼に宴す。同雲藩荻野求之・薩州世子侍読赤崎彦礼・藝州文学頼千秋、及び堀口孟一・爽鳩子允・井子瓊・鈴猶人と同じく賦す。〕

十二街中麴米春 高楼の盃酒城圍に会す 遅々たる日色雲霧を含み 稷々たる松風世塵を絶す 久しく揮毫を廢して一醉を甘んじ 偶々傾蓋に因つて相親しむことを得たり 此の時邂逅す心を論ずるの客 尽く是れ朱門席上の珍¹²

とあり、佐賀藩儒の石井仲車、出雲藩士の荻野求之、薩摩藩士で漢学者の赤崎彦礼、儒者の頼春水、御徒仲間
の井上子瓊と鈴木猶人といった名がある。

天明六年には、

冬日逍遙樓朝望

小樓宜早起 起坐望朝嗽 已畜東山妓 兼開北海樽 徑荒霜已下 楓老菊猶存 忘却鵬兼鷄 逍遙似漆園
〔冬日、逍遙樓の朝望〕 小樓早起に宜し 起坐して朝嗽を望む 已に畜ふ東山の妓 兼ねて開く北海の樽
徑荒れて霜已に下り 楓老いて菊猶存す 忘却す鵬と鷄とを 逍遙すれば漆園に似たり¹³

とあり、逍遙樓とは吉原の娼家、大文字屋の主人である加保茶元成の別宅の名称である。そこから、南畝は加保茶元成のところに泊まったことがわかる。

天明七年には、

冬日同高須諸大夫宴下大夫永井氏池亭詠金鯽魚

原泉応不尽 来自玉河瀆 金鯽看魚楽 清池絶世氛 霞飄風送色 錦碎水成文 疑是濠
梁上 悠然此対君

〔冬日、高須の諸大夫と同じく下大夫永井氏の池亭に宴す。金鯽魚を詠ず〕

原泉応に尽きざるべし 来たること玉河の瀆よりす 金鯽魚の楽しみを看 清池世氛を絶す 霞の飄へるは風色を送り 錦の碎くるは水文を成す 疑ふらくは是れ濠梁の上かと 悠然として此に君に対す¹⁴

とあり、高須藩の家老たちと永井氏の池亭で宴があつたことがわかる。ここから、諸藩の武士たちとかかわりがあつたことが窺える。

天明八年には、

上元宴屠竜公子館

金馬門前白日開 上元春色満楼台 若令飛蓋遊西苑 天下誰当八斗才

「上元、屠竜公子の館に宴す」

金馬門前白日開 上元の春色楼台に満つ 若し蓋を飛ばして西苑に遊ばしめば 天下誰か当る八斗の才¹⁵

とあり、屠竜公子こと酒井抱一との関わりがわかる。また、酒井抱一は姫路城主酒井忠以の弟で画人としても有名であり¹⁶、尻焼猿人の名で狂歌を詠んでいた。

さらに天明七年について『俗耳鼓吹』には次のようにある。

市川三升^{五代}狂歌をこのむ。名を花道つらねといふ。丁未のとし大晦日、曹司谷へまうでたりとて、帰路にたちより、暫といえる大字をかき、かたへに、

いまがさいごかんねん仏といふうちに暫ありてたちかへる春
とかきたり¹⁷。

この記述から、五代目市川団十郎との関わりがあり、団十郎も花道つらねという狂名で狂歌を詠むことがわかる。

また南畝が書いた黄表紙からも交友の広さが窺える。例えば『^{難原}二度の賭（源平総勘定）』では画を喜多川歌麿が、『^{漢国}此奴和日本（寿塩商婚礼）』では北尾政美が画を描いている。

以上のように南畝は幅広く交友関係をもっていたことがわかる。同じ御徒をはじめ、大名や他藩の武士、学者、町人など身分を越えたつながりがあった。このつながりは主に狂歌会や詩会などがもとにある。そもそも狂歌会は身分にこだわらないのである。身分を越えて自由に詠めるということが、広く人々に受け入れられた要因であったと考えられる。南畝もまた狂歌について、「夫狂歌には師もなく、流儀もなくへちまもなし」¹⁸と書いており、この記述から考えても、南畝にとって狂歌は自由に詠むもので分け隔てなくできると考えていたと見受けられる。

さて、南畝は天明七年に数多くいる狂歌仲間との関係を絶ったといわれているが、本当に狂歌仲間との関係が絶たれていたのかという疑問がある。そこで関係を絶ったといわれる天明七年の前年から寛政五年までに期間を絞って別掲表2から交友関係を検証していくことにする。この別掲表2の太字は次の表iに掲載した人物を表す。また別掲表2にA、B、C、Dとふり、Aは武士、Bは学者、Cは町人、Dは不明を表し次の表iにまとめた。

表 i 交友関係一覧表

(A) 武士

名前	備考	狂歌	狂詩	漢詩
小島謙之	唐衣橋洲。田安家家臣。通称源之助。	○		○
土山宗次郎	勘定組頭。公金横領などで死刑になる。	○		○
山崎貫景	朱楽菅江。御先手与力。	○		○
吉見義方	南畝の甥。狂名は紀定丸。 ^{きのさだまる}	○	○	○
井上子瓊	御徒。南畝の門人。狂名は紀躬鹿。 ^{きのみじか}	○		○
鈴木猶人	御徒。南畝の門人。狂名は二歩只取。 ^{にふただとり}	○		○
山口彦三郎	山道高彦。幕臣。馬蘭亭。	○		○
間島守雌	尾張藩。			○
柳沢米翁	大和郡山前藩主の柳沢信鴻。			○
瀬名貞雄	奥右筆組頭格。			○
荻野鳩谷	松江藩士。			○
鈴木松之助善政	鈴木徳卿。御小納戸。芙蓉館。			○
赤崎彦礼	薩摩藩士、漢学者。赤崎貞幹。			○
植木玉厓	半可山人。幕臣。			○
山内尚助	山内穆亭。御先手与力。与左衛門。	○	○	○

(B) 文化人

名前	説明	狂歌	狂詩	漢詩
内山淳時	内山賀邸。江戸六歌仙の一人。国学者。	○	○	○
石井仲車	佐賀藩儒。			○
頼撰秋	頼春水。安芸藩儒。			○
菊池衡岳	紀州藩藩儒。	○		○
春日部錦江	儒学者。折衷学派を大成させる。			○
大田錦城	儒者。			○
樺島公礼	樺島石梁。儒学者。			○
磯谷滄洲	尾張藩の儒学者。			○
岡田寒泉	儒者。寛政六年に代官となる。			○
長久保赤水	地理学者。『大日本史』の編纂に加わる。			○

(C) 町人

名前	説明	狂歌	狂詩	漢詩
稲毛屋金右衛門	平秩東作。煙草屋。	○	○	
加保茶元成	吉原大文字屋の主人。逍遥楼は別宅。	○		
石川雅望	馬喰町の宿屋の主人。狂名は宿屋飯盛。	○	○	

鹿都部真顔	数寄屋橋外の汁粉屋。四方の姓をもらい、四方歌垣を名乗る。	○		
岩瀬醒	山東京伝。狂名は身軽折輔。戯作者、浮世絵師。	○		
万屋助次郎	酒商。十千亭主人。	○		
亀屋久右衛門	茶商。文宝。	○		
万屋六右衛門	麗水。	○		
佐脇長兵衛	伊勢屋長兵衛。糟丘亭。	○		
橋本治右衛門	狂名は酒月采人。 ^{さかづきのこめんど}	○		

(D) その他

名前	説明	狂歌	狂詩	漢詩
平賀源内	風来山人。	○		○
市川団十郎	5世市川団十郎、歌舞伎役者。狂名は花道つらね。	○		
酒井抱一	姫路城主酒井忠以 ^{ただぎね} の弟。画人。	○		○
雪山	牛込薬王寺町の浄栄寺住の僧。			○
半井慶雲	医師。和気君人			○
耆山	浄土宗の僧。			○
浄栄寺海公	牛込薬王寺町の浄栄寺の僧。			○
樋口元良	菊池衡岳の弟。			

(E) 不明

名前	説明	狂歌	狂詩	漢詩
井上子存	井上金蛾の養子。			○
小野勝二郎	小野美卿。号は正文。			○

狂歌、狂詩、漢詩それぞれ詠むものは○で示した。空欄は不明を表す。

小川恭一 編著『江戸幕府旗本人名事典』1巻～別館、原書房、1989～1990年
 国史大辞典編集委員会「国史大辞典」第1巻～
 中野三敏『大田南畝全集』第1巻～第20巻、岩波書店、1985～1990年
 浜田義一郎『大田南畝』吉川弘文館、1963年
 小林ふみ子『天明狂歌研究』、2009年
 以上より筆者作成。

天明七年以降に南畝と関わりがあった人物のなかで、狂歌と関わりがあった人物として、酒井抱一、井上子瓊、鈴木猶人、吉見義方、山道高彦、文宝、麗水、橋本治右衛門などが挙げられる。

また、これまで狂歌との関わりを絶ったといわれる天明七年以降も、南畝はこれまでと同様に交友関係を保ち、宴や花見、酒を携えての集まりや詩会などをもっていることが別掲表2から読みとれる。また、『南畝集』には、これらの関わりが記されている。

以上のことから、これまで狂歌仲間との関わりを絶っていたということは疑問視され、否定されるべきと筆者は考える。その点からみて、これまでのような積極的に狂歌や狂詩をつくることはしていないものの、交友関係には大きな変化がないため、公にせず狂歌や狂詩をつくっていた可能性が高いと筆者はみている。

註

- 1 鈴木俊幸「陽のあたる戯作―蔦屋重三郎の戯作出版をめぐる―」（『雅俗』四号）二四頁。
- 2 沓掛良彦『大田南畝』七八頁。
- 3 市古貞次『日本文学史』4近世、学燈社、四六六頁。
- 4 浜田義一郎『大田南畝』七頁。
- 5 小池正胤「戯作者グループと文人―大田南畝の場合―」（おうふう『言語と文芸』九卷二号）六六頁。
- 6 「奴胤」（『大田南畝全集』第十卷）、四六七、四六八頁。
- 7 浜田義一郎 前掲書（4）二九頁。
- 8 浜田義一郎「南畝の狂歌・狂文」（『大田南畝全集』第一卷解説）、五二五頁。
- 9 浜田義一郎 前掲書（4）二九、三〇頁。
- 『大田南畝全集』前掲書8と同じ。
- 浜田義一郎 前掲書（4）三六、四〇頁。

- 1 1 1 1 1 1 1 1
8 7 6 5 4 3 2 1 0
- 『大田南畝全集』第三、五卷に収められている。
 『大田南畝全集』第三卷、四一七頁、漢詩番号1212。
 同右書、四五一頁、漢詩番号1305。
 同右書、四六二頁、漢詩番号1336。
 同右書、四七六、四七七頁、漢詩番号1381。
 同右書、四八四頁、漢詩番号1400。
 『国史大辞典』第六卷、吉川弘文館、一九八五年、二四五、二五四、二五五頁。
 『大田南畝全集』第十卷、四九頁。
 「四方の留粕」狂歌三体伝授跋（『大田南畝全集』第一卷）二一八頁。

第四節 幕臣の顔と文化人の顔

南畝は天明七年（一七八七）に狂歌界の表舞台からは身を引き、本来の務めである幕臣としての職務を主とするようになる。その南畝に松平定信の改革によって文化人としての変化だけでなく、幕臣としての転機も訪れる。

寛政四年（一七九二）、南畝は第一回の学問吟味に応じたものの、結果は落第であった。試験の出来は合格に値するものだが、狂歌や戯作で活躍していた南畝を嫌った試験官の一人であった森山隆盛が南畝の人格に問題ありとして譲らなかつたために落第させられたと言われている¹。しかし、南畝は二年後の寛政六年に学問吟味にも一度臨み、目見得以下で主席合格を果たした。このとき、南畝の門人である井上子瓊と鈴木猶人も学問吟味を受け、ともに次席で合格した²。

寛政八年に支配勘定になり、これまでの七十俵五人扶持から百俵五人扶持となった³。寛政十一年に南畝は孝行奇特者を顕彰するために幕府が発起した『孝義録』の編集を命じられ、寛政十二年には竹橋にある幕府勘定所の記録文書の整理に携わった⁴。

享和元年（一八〇一）には大坂の銅座出役に任じられ、一年ほど大坂に赴任した。銅座は幕府の重要な輸出品であった銅を管轄する役所であり、仕事は忙しかったようだが、南畝はてきぱきと役務をこなした⁵。しかし、狂歌師としての南畝の名前は上方まで聞こえており、狂歌を乞われることも多かつたらしく、寛政の改革の余波も収まり、狂歌を詠むことへの警戒心も薄れていた南畝は、乞われるままに蜀山人の狂名を用いて再び狂歌を詠むようになった⁶という。

大坂から江戸に戻ると、しばらくして南畝は長崎奉行所への出役を命じられ、一年ほど長崎に赴任した。レザノフの来航があり、多忙な勤務であったようである⁷。その間にも清の貿易船がもたらした書籍を目にしたり、来航の清の人と筆談をしたりした⁸。

文化五年（一八〇八）に南畝は玉川の堤防巡視の役を命じられ、四か月にわたって玉川流域を巡検して回った。玉川巡視においてもこれまで同様に南畝は大いに力を発揮した。巡視が終わった後に、治水工事手伝の大家家からはお礼として銀一七枚を贈られ、精勤に対する褒賞として幕府からは五人扶持を加増され、その年の年末には宅地拝領の願い出も聞き届けられている。ことからも明らかである。

『調布日記』『玉川砂利』『玉川披砂』『向岡閑話』『玉川余波』という五部の書が約四ヶ月の玉川巡視中に成っている¹¹。

幕臣の務めを果たす一方で、これまでのいわゆる「文化人」として顔も合わせもっていた。

寛政七年（一七九五）正月に南畝は、鹿都部真顔に三体伝授を行い、判者の地位を譲り、それ以降真顔は四方の姓を名乗っていた¹²。これによつて真顔は四方赤良こと大田南畝の後継者として広く知られることになったと考えられる。

『四方の留粕』には「狂歌堂に判者をゆづること葉」と題して、

鹿都部真顔ふかくすきやの河岸にありて、西岸の思ひ浅からず、すでに狂歌の堂にのぼれり。（中略）河原崎の翁わたしと、もに、三体の伝ことくく伝へぬ。（中略）今より四方の道しるべをとほし、南をさせる小車の、わが一流の狂歌堂なるべし。

欲問狂歌堂 先開枝折戸

寄語諸連中 勿迷四方路¹³

とあり、真顔に四方連を託したことがわかる。その一方、この『四方の留粕』は南畝の書いたものを真顔が編集したもので、浜田義一郎氏によると「自分が四方の正系であると誇示する意識もある」¹⁴と指摘する。

ではなぜ真顔は四方の後継者としての正統性を示す必要があったのか。

狂歌師たちはそれぞれ「連」に属していた。これは狂歌師たちのグループであり、いくつもの狂歌連が存在していた。狂歌の「作者には下級武士や上層町人が多く、武士と町人が一体化した文化的グループ＝連」と竹内誠氏も示している¹⁵。

ここに代表的な狂歌連とその中心的人物を挙げる。

四方連……四方赤良（大田南畝）、二歩只取

伯楽連……宿屋飯盛、紀定丸、頭光つむぎのひかる

数寄屋連……万象亭、鹿都部真顔、銭屋金埒

朱楽連……朱楽菅江

四谷連……唐衣橘洲

落栗連……元木綱、智恵内子

吉原連……加保茶元成

本町連……大屋裏住、腹唐秋人

芝連……浜辺黒人

堺町連……花道つらね

この他にも赤坂連、赤松連、飯田町連、市谷連¹⁶、小石川連、木材連、浅草連、三筋連、日吉連、芍薬連など多数の連があった¹⁷。また、連は四方連にみられるような個人のもとにあつまつた連と、吉原連や芝連などにみられるような地域での連があった¹⁸。

その連やメンバーは固定したものではなく離散集合を繰り返していたとされる¹⁹。狂歌連は常に一定ではなく、その時々で変化を遂げてきたのである。また南畝を中心にしていた四方連は特にその動きが激しかったようにみ

える。

なかでも四方連の動きは活発であったといえる。伯楽連を傘下にもち²⁰、蔦唐丸こと蔦屋重三郎や尻焼猿人こと酒井抱一とも関わりが深く狂歌界の中心にいた²¹。

真顔は数寄屋連の中心的存在として活動していた²²。数寄屋連はもともと木網の門下にあつたが、力を付けていくなかで数寄屋連中が独立して動くようになる。その数寄屋連の活動は、真顔、金埒が南畝への接近と連動したとされる²³。

この動きのなかで数寄屋連は四方連の傘下となつたと考えられる。そうなると真顔はもとからの四方連側にいたわけではなく、途中から四方連側にやってきたわけであり、もともとから四方連傘下にあつた伯楽連からすれば、四方の後継者が真顔であることが面白くないわけである。

宿屋飯盛が江戸払いになつたあと、伯楽連の中心にいた頭光は南畝が使う扇巴の判を譲り受けることに成功する²⁴。その後も光は南畝の号である「巴人亭」をもらっている²⁵。こうして四方の後継者争いがあつたものの、四方の姓や狂歌判者の地位を保証する狂歌三体伝授によって真顔は光をおさえて後継者となり、寛政八年に四方歌垣を名乗り始めたのである²⁶。

南畝は狂歌界において動きがある中でも、表立った動きはなく、ひたすらに幕臣の職務に専念していた。

しかし南畝はこのころ幕臣としての顔と文化人としての顔をあわせもっていた。様々な人から書物を借りては書き写すなどし、また抄書の作成などをしていた²⁷。

そのような南畝であるが、『会計私記』に寛政九年正月に年始まわりをした記録²⁸に注目すべき記述がある。そこには、蔦屋重三郎、鈴木松之助こと鈴木徳卿、星野瀬衛兵こと地口有武、塙保己一、詩会などを行った浄栄寺、山口彦三郎こと馬蘭亭、吉見儀助こと甥の紀定丸の名が載っており、狂歌仲間との関わりが窺える。

そこからも、これまでの交友関係を維持しつつ、幕臣としての仕事を着実にこなしていた様子を垣間みるこ

ができる。南畝の職務も決して楽なものではなかった。学問吟味で合格して以降の南畝の業績は以下のような
る。

・『孝義録』の編纂

・竹橋書庫での書類整理

・大坂銅座出役

・長崎奉行出役

・玉川巡視

また年老いてからの職務であることが、

今朝右の上齶の齒落たり。のこる所わづかに上に三ツ下に弐ツなり。八九年ばかりさきに難波にありて、しば
く齒の落る事ありしが、其後長崎にありし時も落る事なかりき。とにもかくにも老にける身のいかゞはせん。

と『調布日記』²⁹に書かれていることからわかる。

南畝は幕臣としての老いと激務の中においても、名所旧跡を探訪したり、様々な書物などを抜き書きしたり、
金石文を書き写したり、日記を書き、詩歌を書くなどしていた³⁰。晩年には狂文集、漢詩集を刊行している³¹。
まさに南畝の幕臣として腕を揮う傍ら、文化人としての顔をもち続け、二足の草鞋をうまく使い分けていたこと
が窺える。

- 1 沓掛良彦『大田南畝』一五七、一五八頁。
- 2 日野龍夫「南畝の漢詩文(三)」(『大田南畝全集』第五卷解説)五八〇頁。
- 3 浜田義一郎『大田南畝』一五五頁。
- 4 日野龍夫「南畝の漢詩文(二)」(『大田南畝全集』第四卷解説)四三六頁。
- 5 浜田義一郎 前掲書(3)一七〇頁。
- 6 同右書、一七一頁。
- 7 揖斐高「細水物理の精神」(『大田南畝全集』第八卷解説)七一四頁。
- 8 右に同じ。
- 9 浜田義一郎 前掲書(3)二〇四、二〇六頁。
- 10 同右書、二〇九頁。
- 1 揖斐高「南畝老年の生活記録」(『大田南畝全集』第九卷解説)六六八頁。
- 1 『大田南畝全集』第九卷にそれぞれ収められている。
- 2 小林ふみ子『天明狂歌研究』二八六頁。
- 3 『大田南畝全集』第一卷、二〇六頁。
- 4 浜田義一郎「南畝の狂歌・狂詩」(『大田南畝全集』第一卷解説)五四五、五四六頁。
- 5 竹内誠『江戸と大坂』(大系日本の歴史10、小学館、一九八九年)、二五四、二五五頁。
- 6 浜田義一郎 前掲書(13)五四〇頁。
- 7 市古貞次編『日本文学全史』4近世、四六九頁。
- 竹内誠 前掲書(14)に同じ。
- 1 小林ふみ子 前掲書(11)二九一頁。
- 8 谷口學『元木網と天明狂歌の展開』、楓橋書房、二〇〇六年 一八、一九頁。
- 1 小林ふみ子 前掲書(11)二九二頁。
- 2 別掲の大田南畝年表を参照。
- 2 小林ふみ子、前掲書(11)二九〇頁。
- 2 同右書、二九一頁。
- 2 同右書、三〇一、三〇二頁。

3	3	2	2	2	2	2
1	0	9	8	7	6	5
別掲	揖斐高	『大田南畝全集』	『大田南畝全集』	『大田南畝全集』	別掲の大田南畝年表	同右書、三〇三頁。
の大田南畝年表を参照。	前掲書(9)六五四、六七一頁。	第九卷、一七九頁。	第十七卷、四八、五十頁。	表を参照。	三〇三、三〇四頁。	

おわりに

本論は、幕臣であり有名狂歌師であった大田南畝の狂歌界との関わりについて、寛政期前後に焦点を当てた研究である。この研究の目的は、南畝の刊行物や執筆の変化、南畝の交友関係について明らかにすることで、南畝の寛政期前後の変化をみていくことであった。これによって、天明七年に南畝が狂歌界や狂歌仲間と絶縁したという先行研究の定説に疑問をなげかけ、真偽を確かめていくことであった。本論では刊行物や交友関係といったこれまでとは異なった視点からのアプローチを試みた。

第二章二節では、南畝が刊行した作品や執筆の変遷をまとめた。これによって天明八年には『四方のあか』『画本虫撰』が刊行され、寛政二年には『二大家風雅』が刊行されていることがわかった。また寛政元年に朱楽菅江がまとめた『潮干のつと』には南畝が狂歌を寄せていることが判明した。そして、天明八年に「夷曲十二首」を書いていたことが明らかになった。

これらの点から南畝が狂歌との関わりを絶った天明七年半ば以降に狂歌、狂詩をつくっていたことは事実であることが明らかになった。

第二章三節では、狂歌界から絶縁する前年の天明六年から寛政五年までの南畝の交友関係を明らかにした。そのなかで、黄表紙などの作者が狂歌師としても活動しており、南畝もその一員であったことがわかった。また狂歌は身分にとらわれず参加でき、それが南畝の交友関係の広さにつながっていることもわかった。

主題である南畝が本当に絶縁したかどうかであるが、実際に絶縁したのであれば、狂歌と関わりのある人物との接点はなくなるはずである。しかし、南畝は天明七年以降も尻焼猿人こと酒井抱一などに関わりがあり、これまでとそれほど変わらない交友関係を展開していることがわかった。この点から考えても、公で狂歌を詠むことはなくとも、気心の知れた仲間との集まりやプライベートでは狂歌を詠んでいた可能性があることを指摘した。

またこの時期の狂歌が少ないのは、狂歌の言捨ての原則に則ったことと土山の一件、出版統制令といったことが複合的に重なったことが原因であることを指摘した。

ここで注意したいのは『大田南畝全集』に南畝の全ての作品が網羅されているわけではなく、未収録のものや、南畝作かどうかわからない作品があること、原本の所在不明のものが少なからずあることである。

第二章四節では、寛政期以降の南畝についてみてきた。南畝は表立った活動をやめたが、学問吟味において首席合格をし、狂歌師から幕臣へと比重を変えた。しかし、『會計私記』にあったように、年礼のなかに御徒仲間や狂歌や狂詩を詠んでいた鈴木猶人や版元であり狂歌師でもある蔦屋重三郎なども入っており、幕臣の務めだけに専念していたということは否定され、狂歌仲間との関わりがあったことは明らかである。

南畝は幕臣としても文化人としても優れており、特に狂歌師としての地位は高いものであったことは、南畝が率いた四方連の後継者争いからも明らかである。生涯にわたり広い交友関係を保った南畝は人との関わりを絶つたとはなかなか考えづらいものがある。

筆者は以上のことから、天明七年以降も狂歌を詠んでいたことは明らかであり、南畝は狂歌界や狂歌仲間と絶縁したことは否定されると結論づける。

「後記」

南畝は何でも書き留め、記録をし、また数多くの書物を写したり、抄書をつくったりしてきた。そのため大田南畝全集は二十巻もある膨大な量であった。またそのなかには、漢詩や漢文体のものが多くあり、筆者にはそれを自力で解読する力もないため、全集に書かれた読み下しや注釈に専ら頼ってしまった。これも今回の大きな反

省点の一つである。その全集を完全に読み込むことができなかったために、南畝の生涯にわたっての交友関係を明らかにすることはできなかった。また、大田南畝年表においても、本論で取り上げたところに重点がいつてしまい、南畝が若かりしときや晩年の頃は不完全で、取りこぼしが非常に多いものになってしまった。

そして、小林ふみ子氏の『天明狂歌研究』で指摘された「よみひとしらず」に関しては、筆者の力ではどうにもならず、検討することもできなかった。また、南畝が絶縁したとされる期間（天明七年半ばく享和元年頃）に詠んだ狂歌を「夷曲十二首」だけしか明示することができなかったことが悔やまれる。南畝の作品や交友関係はまだまだ調べ途中であると思われるので、その点は今後の研究課題として取り組んでいきたい。

資 料 編

凡例

(一) 大田南畝年譜や刊行物年表、交友関係表(抄)における空欄は不明であることを示す。

(二) 大田南畝年譜における出典欄の○内の数字は大田南畝全集の巻数を、その後ろの数字は頁を示す。ただし、③④⑤の後ろの数字はその巻にある漢詩の通し番号を示す。

また、Iは浜田義一郎『大田南畝』、IIは小林ふみ子『天明狂歌研究』を示し、後ろの数字は頁を示す。

(三) 交友関係年表(抄)は大田南畝年譜から寛政期前後の交友関係がわかる事柄を抜き出したものであるため、出典は省略した。

表1 南畝の執筆、刊行、編纂に関する表

和暦	西暦	南畝執筆、刊行、編纂物名	種類	出版
明和3年	1766	『明詩擢材』	作詩用語字典	○
明和4年	1767	『寝惚先生文集』	狂詩狂文集	○
明和6年	1769	『売飴土平伝』	漢文による滑稽本	○
明和7年	1770	『明和十五番狂歌合』		
明和8年	1771	『麓の塵』起筆。		
安永3年	1774	『宝合の記』	狂歌集	○
安永4年	1775	『から誓文』執筆。	狂文	○
		『甲駅新話』	洒落本	○
安永5年	1776	『一話一言』書き始める。	随筆	△
		『評判茶臼藝』	評判紀	○
安永6年	1777	『阿姑麻伝』	狂詩	○
安永7年	1778	『世説新語茶』	洒落本	○
		『春笑一刻』	咄本	○
安永8年	1779	『うぐひす笛』	咄本	○
		『鯛の味噌津』	咄本	○
		『深川新話』	洒落本	○
安永9年	1780	『粹町甲閨』	洒落本	○
		『七拳図式』	洒落本	○
		『南客先生文集』	洒落本	○
		『道中粹語録』(変通軽井茶話)	洒落本	○
安永10年・天明元年	1781	『満の宝』	咄本	○
		『菊寿草』	黄表紙評判記	○
天明2年	1782	『初鯉』	咄本	○
		『かくれ里の記』の執筆。	狂歌狂文	△
		『岡目八目』	黄表紙評判記	○
		『三春行楽記』を記す。	日記	△
		『江戸花海老』	洒落本	○
天明3年	1783	『福笑』	咄本	○
		『玉手箱』	咄本	○
		『和漢同詠』		○
		『万載狂歌集』	狂歌集	○
		『めでた百首夷歌』	狂歌集	○
		『通詩選笑知』	狂詩集	○
天明4年	1784	『吉原燈籠評判記』	評判紀	○
		『飛花落葉』	遺文集	○
		『老菓子』	狂歌集	○
		『此奴和日本』	黄表紙	○
		『梶原再見二度の賭』	黄表紙	○
		『返々目出鯛春参』	黄表紙	○
		『頭てん天口有』	黄表紙	○
		『拳角力』	黄表紙	○
		『年始御礼帖』	黄表紙	○
		『八重山吹色都』	黄表紙	○
天明5年	1785	『通詩選』	狂詩集	○
		『檀那山人藝舍集』	狂詩集	○
天明6年	1786	『徳和歌後万載集』	狂歌集	○
天明7年	1787	『狂歌新玉集』	狂歌集	○
		『手練いつはりなし』	黄表紙	○
		『狂歌三十六人撰』	狂歌集	○
		『狂歌才蔵集』	狂歌集	○
		『通詩選諺解』	狂詩集	○
		『狂歌千里同風』	狂歌集	○

文化15年・文政元年	1818	『千紅万紫』(せんしまんこう)	狂文集	○
		『万紅千紫』	狂文集	○
		『蜀山百首』	狂歌集	○
文政2年	1819	『四方の留粕』	狂文集	○
文政3年	1820	『杏園詩集』	漢詩集	○
文政4年	1821	『杏園詩集統編』	漢詩集	○

○は刊行したことを表し、△は刊行はせずに綴じたことを表す。

中野三敏 他編『大田南畝全集』、浜田義一郎『大田南畝』、沓掛良彦『大田南畝』より作成

表2 交友関係年表（抄）

年	月	事項
宝曆十三年（一七六三）		内山賀邸に入門。平秩東作を知る。（A、C）
明和三年（一七六六）		『明詩擢材』刊行。官瀬竜門、内山賀邸が序を寄せる。跋は中神忠順。（B）
		平賀源内と会う。（D）
明和四年（一七六七）	九月	『寝惚先生文集』刊行。源内が序を寄せる。（D）
明和六年（一七六九）		唐衣橋洲宅にての狂歌会に参加。（A）
明和七年（一七七〇）		「明和十五番狂歌合」に参加。
安永三年（一七七四）		牛込専光寺にて宝合を開催。
天明元年（一七八一）	九月	土山宗次郎の酔月楼にて宴。（A）
天明二年（一七八二）	一月	土山邸にて酒宴。（A）
天明三年（一七八三）	一月	市川団十郎に狂歌を贈る。（D）
天明六年（一七八六）	一月	菅江宅に「雑煮もち」の題で狂歌会（A）
		佐賀藩儒石井仲車を迎えて麹町馬景徳の松琴楼に宴す。荻野鳩谷・赤崎彦礼・頼撰秋・堀口孟一・鷹見星阜・子瓊・猶人ら出席。（A、B）
		石井仲車の帰国宴を松琴楼にて催す。赤崎彦礼ら来会。（A、B）
		石井仲車が肥前に帰るための宴を新橋の酒楼にて催す。頼千秋・鳩谷・星阜・古屋昔陽・真野氏・福富氏・劉子調が会す。（A、B）
	七月	津田蝴蝶子・井上子瓊・植木玉匡と共に不忍池の蓮を見、茶屋にて長寿者三名の書付を写す。（A）
	八月	堀の内の子に詣で、帰途榊原氏に寄る。狂歌一首。お賤を加保茶元成の別荘逍遙楼にうつつ。（C）
		両国橋辺の靈亀楼に山崎翁八一賀会あり、出席。
天明七年（一七八七）	三月	山道高彦（馬蘭亭）・窪田徳左衛門（巻藁射久）・榊原士立（日蔭葎）と染井山荘の柳沢米翁を訪れ、六義園を見る。（A）
		春日部錦江宅にて飲酒。舟遊。（B）
	七月	井上子瓊・鈴木猶人に所懐を示す。錦江に手紙を書く。（A、B）
	八月	菅江・橋洲・雅望・真顔らと虫聞きの狂歌会。（A、C）
		岡田順之が尾張に帰るのを送る。
	九月	錦江と酒家に飲む。（B）
	十月	五世市川団十郎が立寄り、暫の大字と狂歌を書き付ける。（C）
		井子熙（井上春蟻か）と酒楼に飲む。
		高須藩の家老らと下大夫永井氏の池亭に宴す。
		夜、錦江と酒家に飲む。（B）
		井子熙の臨海楼に題詩を寄せる。
		椿井氏の席上、京都酬恩庵主に贈詩。
		藤子徳が久能山に行くのを送る。
		柳川侯（立花鑑通）の六十を賀す。
	十二月	立春、伊庭子徳、南畝を訪問、ともに墨水春なる酒を酌みかわす。
		狂歌仲間と交わりを断つ。
	一月	酒井抱一の館で宴。（D）
	一月	沼元之の父の七〇を賀し五言古詩を賦す。
天明八年（一七八八）	一月	自宅にて小集。藤是徳に詩を寄せる。

	<p>名見崎大喜より、昨年作った狂歌と言葉書を見せられ、「晦日の月」と名付ける。</p>
	<p>自宅小集、熊阪台州の送り来る不二石の引を作る。</p>
	<p>二月 佐賀の石井仲車来る。(B) 石井仲車を迎え麴町の鶴巢亭にて宴。赤崎彦礼・稻垣恵明・鷹見星卓・荻野鳩谷・馬景德・辺道彦・岡故完・原子文・井上子瓊・鈴木猶人・春日部錦江ら来る。席上、赤崎彦礼に詩を贈る。(A、C)</p>
	<p>山本氏の早稲田の別業を訪れ「稻雲園記」を草し、詩「十二詠」及び「夷曲十二首」を詠む。 南畝宅に石井仲車の帰国送別宴を開く。また、僧雪山の西遊を送る。(C、D)</p>
	<p>二月 『熊沢先生行状』末に草加十郎より贈られた旨を記す。 飯田町の万屋と共に浅草鳥越伊勢屋源右衛門所蔵の古書画を見、雪山人の書を贈られる。(C)</p>
	<p>錦江と自由軒で飲酒。席上、自由軒主人上方に立出。(B) 香山の詩に和す。(D)</p>
	<p>伊庭子徳とともに郊行。 御小納戸頭高井大隈守実員の小普請奉行になるのを賀す。 平山氏の七〇を賀す。</p>
	<p>四月 伊勢の西村節甫の父七〇、母六一を賀し寿詩をつくる。 香山上人の山房を訪問。(D) 榊原士立の草津温泉に遊ぶを送る。 源益之の甲斐に帰るのを見送る。 金鶏道人の詩を寄せ来るに和す。 普門院主満、阿波の使者に従って南海に行くのを送る。 樋口元良の新居を訪問。(D)</p>
	<p>平野氏大坂に行くのを送る。 春日部錦江が酒を持って来る。(B)</p>
	<p>一月 伊庭子徳と酒を飲む。 鈴木徳卿の芙蓉館を訪問。席上、柴田氏に贈詩。また、井上子存の詩を寄せられるのに和韻。(A)</p>
	<p>一月 鈴木徳卿の芙蓉館を訪問。(A) 芙蓉館にて詩会。(A)</p>
	<p>一月 夜、井上子瓊の長松館に詩宴。(A) 十千亭主人と墨水に遊び桃花を賞す。(C)</p>
	<p>四月 宮田惟孝宅にて酒を飲み、詩会。 東海道へ行く春日部錦江を送る。(B) 膝是徳宅にて酒を飲む。</p>
	<p>六月 宮田惟孝宅にて会集、七夕詩会。 菊池衡岳を訪問。(B)</p>
	<p>七月 芙蓉館に会集。(A) 十千亭主人と江東にて遊ぶ。(C) 鈴木徳卿の芙蓉館で初めて大田錦城に会い、詩を贈る。(A、B) 鈴木徳卿・井上子瓊・鈴木猶人と西郊に遊ぶ。(A) 麴町の鶴巢楼にて佐賀藩儒石井仲車の別宴に参加。出席は頼春水・樺島石梁・菊池衡岳・鷹見星卓・稻垣恵明・西川国華・井上子瓊・菊池博甫・馬景德。(A、B) 再び石井仲車の送別宴が邸舎で行われ、席上で仲車より崑崙硯を贈られる。(B) 馬景德と樹王山成就院で遊ぶ。</p>
<p>寛政二年(一七九〇)</p>	
<p>天明九年・寛政元年 (一七八九)</p>	

	三月	十千亭主人と御殿山で遊び、花見。 鈴木徳卿・井上子瓊と鈴木猶人宅を訪ね、山茶花を賞す。(A)
		十千亭主人と金輪寺にて遊び、花見。(C)
		榊原士立と柏木村円照寺で花見。
		夜、鈴木徳卿の会、鈴木猶人と賦詩。(A)
		夜、延岡大夫内藤氏宅にて宴。席上、三輪花信齋に詩を寄せる。
		浄栄寺海公・僧雪山・春日部錦江・佐輻卿とともに林梅院にて遊ぶ。(B、D)
寛政三年(一七九二)	三月	十千亭と西が原にて遊び、牡丹を賞す。(C)
	四月	鈴木徳卿・大田錦城・井上子存・井上子瓊・鈴木猶人と木下川に舟遊び。(A、B)
	四月	井上子瓊宅に『十八史略』を講じ、竟宴。(A)
	五月	膝是徳のもとに集つて『爾雅』を読む。
	五月	春日部錦江、酒を携え来訪。(A)
	六月	鈴木徳卿・鈴木猶人・井上子存と不忍池の蓮をみる。(A)
	六月	尾張藩間島守雌の二柱館にて詩会。出席は磯谷滄洲・岡田順之・春日部錦江・栄広子・僧示詮。(A、B)
		夜、芙蓉館会集。医師半井慶雲(和気君人)とともに賦詩。(D)
	八月	間島守雌の市ヶ谷の邸舎に会集。萩花をみる。(A)
	八月	井上子瓊・鈴木猶人・春日部錦江・僧雪山とともに官田惟孝宅に集まり、詩会。(A、B、D)
	八月	春日部錦江、酒饌を携え来訪。(B)
	八月	春日部錦江の近郊庵を訪問。(B)
	九月	鈴木徳卿と巢鴨・染井に行き、吉宗の賞した躑躅をみる。(A)
	九月	鈴木徳卿と日暮里にて月を観賞。(A)
	九月	磯谷滄洲と聯句をこころみる。
	九月	鈴木徳卿・春日部錦江と牛島にて遊ぶ。(A、B)
寛政三年(一七九二)	一月	香山の八十歳を祝う。(D)
	一月	南畝宅にて小宴。
		香山房にて詩会。(D)
		尊寿院環公が尾張に帰るのを送る。
	三月	春日部錦江と放下着を市ヶ谷の浄栄寺にてみる。(B)
		間島守雌宅にて酒を飲み、詩会。(A)
		覚雲三房にて会集。
	七月	十千亭と墨水に舟遊び。(C)
	八月	甘露門で月を観賞。
		酒井抱一を訪問。(D)
		竜巖寺の林孟高の宴に行く。
	九月	間島守雌宅にて宴。(A)
		井上子存を訪問。
		品川得月楼にて酒を飲む。
		十千亭に会集。(C)
	十二月	甘露門にて酒を飲む。
	十二月	一枝巢にて酒を飲む。
寛政四年(一七九二)	一月	柳橋万屋にて宴。この日の席画を集め『二水七画画巻』が成る。
	閏二月	十千亭・麗水・文宝と根岸の某氏の別荘に行く。途中、小石川・日暮里諸寺の桜をみる。(C)
	閏二月	十千亭と上野の花見に行き麗水に会う。(C)
	閏二月	麗水・文宝・十千亭とともに神田明神・木母寺にて花見。木母寺で石川雅望・するが屋某に会う。(C)
	閏二月	十千亭と花見。白山権現・養源寺・駒込吉祥寺・神明社・平塚明神・飛鳥山・王子権現・護国寺と行く。(C)

寛政五年（一七九三）	閏二月	春日部錦江・吉見義方・橋本治右衛門（酒月米人）とともに二軒茶屋で酒宴。永代寺の園女桜をみる。（A、B、C）
	閏二月	十千亭・麗水とともに法善寺・七面社・大久保西向の天神・別当大乗院の桜をみて、大筆筒町の野村家で休息。百人町の榊原氏を訪ね、ともに柏木村の円勝寺の右衛門桜をみる。（C）
	閏二月	春日部錦江・佐脇長兵衛（糟丘亭）・雪山とともに御殿山・東海寺・来福寺の桜をみる。来福寺で蓼太の句をみる。大井西光寺をみて鮫洲の酒家にて飲食。（B、C、D）
	三月	覚雲山を訪問。
	三月	武州新座郡の鈴木氏を訪ねる。
	三月	間島守雄の一柱館を訪問。（A）
	五月	甘露門で会集。
		夜、冢子文の月亭で会集。
	八月	瀬名貞雄宅に岡田寒泉と詩を賦す。（A、B）
		甘露門にて会集。
		伶人岡氏の六十を賀す。
		甘露門にて酒を飲む。
	三月	甘露門にて会集、詩宴。
	三月	長静斎を訪問。
	七月	小野美卿宅にて酒を飲む。
	七月	長静斎を訪問。
	八月	佐賀藩中屋敷の石川良弼宅舎に会集。
		児玉某・篠本竹堂と堀口幽谷の待清居にて会う。
		瀬名貞雄宅にて詩を賦す。（A）
		菊池博甫の子お定と散策。
		水戸の長久保赤水に会い、その松月亭に題詩を寄せる。（B）
	九月	山東京伝の新たに煙草袋屋を開くと聞き、詩を贈る。（C）
		丹丘子・春日部錦江とともに山内穆亭宅にて会い、昔話に興じる。（A、B）
	十二月	甘露門にて酒を飲む。

この「交友関係年表（抄）」は、南畝が狂歌界と絶縁したとされる天明年前後の交友関係がわかる部分を「大田南畝年表」から引用したため、出典等は省略した。

表3 大田南畝略歴

年	月	事項	年齢
寛延二年(一七四九)		江戸牛込中御徒町に生まれる。	
宝暦六年(一七五六)		多賀谷常安に就き、学問を始める。	八歳
宝暦十三年(一七六三)		内山賀邸に入門。	十五歳
明和二年(一七六五)	七月	御徒頭京極左門組配下の御徒として御抱入。	十七歳
寛政八年(一七九六)	十一月	躰躰之間にて支配勘定を仰せ付けられる。	四八歳
寛政十一年(一七九九)	一月	大坂銅座を命じられる。	五一歳
		銅座詰が取りやめになる。孝行奇特物取調御用方へ出役を命じられる。	
寛政十二年(一八〇〇)	一月	御勘定所諸帳面取調御用を命じられる。	五二歳
寛政十三年・享和元年(一八〇一)	一月	大坂銅座詰を命じられる。	五三歳
享和二年(一八〇二)	四月	大坂銅座の功により白銀7枚を賜る。	五四歳
享和四年・文化元年(一八〇四)	六月	長崎奉行所行きを命じられる。	五六歳
文化五年(一八〇七)	十二月	玉川巡視に立出。	六〇歳
文政六年(一八二三)	四月	南畝没す。	七五歳

大田南畝年表

年	月	事項	年齢	出典
寛延二年(一七四九)		江戸牛込中御徒町に生まれる。		
宝暦六年(一七五六)		多賀谷常安に就き、学問を始める。	八歳	I I
宝暦十三年(一七六三)		内山賀邸に入門。平秩東作を知る。	十五歳	I I
明和二年(一七六五)	七月	御徒頭京極左門組配下の御徒として御抱入。	十七歳	①⑦ 5、43、 ②③ 5
明和三年(一七六六)		『明詩擢材』刊行。	十八歳	I I
明和四年(一七六七)	九月	『寝惚先生文集』刊行。	十九歳	① 3 6 6
明和六年(一七六九)		『壳飴土平伝』刊行。	二十一歳	I I
明和七年(一七七〇)	一月	唐衣橋洲宅で初の狂歌会。東作らと参加。		
明和八年(一七七二)		『明和十五番狂歌合』	二十二歳	II 3 7 9
安永元年(一七七二)		『麓の塵』起筆。	二十三歳	①⑨ 5 0 4
安永三年(一七七四)		狂詩「明和大火行」を賦す。	二十四歳	② 4 8 6、 ④ 6 6 ⑩
		牛込恵光寺で宝合会。三点出品する。	二六歳	⑬ 5 7 8
		『宝合の記』刊行。		
		「から誓文」執筆。		
安永四年(一七七五)		『甲駅新話』刊行。	二七歳	I I
安永五年(一七七六)		『評判茶白藝』刊行。	二八歳	⑦ 1 9 1
		『高笑』『福寿草』刊行。		
安永六年(一七七七)	一月	『阿姑麻伝』刊行。	二九歳	① 3 9 9
安永七年(一七七八)		『世説新語茶』刊行。		
		『春笑一刻』刊行。	三〇歳	⑦ 4 1 7
		『うぐひす笛』刊行。		
		『鯛の味噌津』刊行。		
安永八年(一七七九)	一月	『深川新話』刊行。	三一歳	I I
		『粹町甲園』刊行。		
	六月	大森華山没す。		
	七月	七夕、四溟、菅江、穆亭、河益之、錦江、井生と高田で遊ぶ。		③ 6 6 8
	九月	十四夜、高田で遊び、美卿宅を訪ねる。		③ 7 0 4
	九月	十五夜、高田で遊ぶ。帰路、安子潤宅で宴。		③ 7 0 5
	九月	十六夜、高田で遊び、井上玄里の韻を和す。		③ 7 0 6
	十二月	平賀源内獄死。		
安永九年(一七八〇)		長男定吉生まれる。	三二歳	I I
		『南客先生文集』刊行。		
		『道中粹語録』(変通軽井茶話) 刊行。		
		松崎観海の墓に謁する。		③ 7 5 7
		布施氏を訪ねて、墓をみる。		③ 7 5 8
		錦江らと美卿の朗月館にて宴。		③ 7 6 2
		四溟、衡岳、穆亭、君節、井生、吉見義方と耆山上人の房に集まり、詩会。		③ 7 6 3
		井伯秀宅にて花を賞す。四溟、衡岳、君節、穆亭、山采美、森子厚と詩を賦す。		③ 7 6 8
	一月	吉祥閣に登る。		③ 7 6 9
		『万の宝』に序を寄せる。		⑦ 5 0 2
		南畝宅にて会集。膝童子が高尾山から来る。		③ 7 7 9
		榊原士立の園亭を訪ねる。		③ 7 8 7
		大窪で遊び、帰路に錦江を訪ねて飲む。		③ 7 8 8
		鷺尾山人に詩を贈る。		③ 7 8 9
		小集。		③ 8 0 1

安永十年・天明元年
(一七八一)

子瓊、藤伯慶と海福寺で遊ぶ。吉子衛、鷺尾山人と詩を賦す。	③	8	0	3
著山上人の山房に集まり、詩会。	③	8	0	7
森周男と洞雲寺の元石師を訪ねる。	③	8	1	0
穆亭、藤・吉氏と錦江を訪ねる。	③	8	1	8
七月 七夕、穆亭、菅江、百順、美卿、熊谷仲弼、金子徳、藤伯慶、子瓊、河益之、錦江、吉見義方と竜隠庵で遊ぶ。詩会。	③	8	2	3
小納戸鈴木徳卿に謁す。館を芙蓉という。	③	8	2	6
七月 『麓の塵』卷十四起筆。	③	8	2	6
芙蓉館に集まる。	③	8	3	0
八月 十四夜、竹土興、子瓊、島田左内と市ヶ谷里長佐野氏と飲む。	③	8	3	5
八月 十五夜、安子潤の一壺亭に集まる。	③	8	3	6
穆亭、美卿、錦江と雑司が谷で遊ぶ。	③	8	3	7
竹土興、子瓊と深川で遊ぶ。増林寺を通る。	③	8	4	4
洲崎で遊ぶ。	③	8	4	5
子瓊に詩を寄せる。	③	8	4	6
木子荘の巢松館に集まる。	③	8	4	9
四溟、衡岳、穆亭、君節、美卿、錦江と藪氏の別荘で遊ぶ。	③	8	5	2
玉川で遊ぶ。	③	8	5	4
芙蓉館にて琴棋書画を詠ず。	③	8	5	7
芙蓉館に集まる。東江に詩を贈る。	③	8	6	1
九月 井上玄里没す。	③	8	6	7
安子潤を訪ねる。	③	8	6	9
十一月 『麓の塵』卷十九成る。	③	8	6	9
十一月 『麓の塵』卷十二成る。	③	8	6	9
十一月 吉田香蘭らと官医の安子潤の一壺亭で宴。	③	8	7	8
藤文卿、中神忠順らと芙蓉館に集まる。	③	8	7	9
著山上人の山房で七物を賦す。	③	8	7	9
十二月 塙保己一から『真俗交談記』を借り写す。	③	8	8	0
十二月 『麓の塵』卷十四成る。	③	8	8	0
四溟、衡岳、森周男、穆亭、井伯秀、井公亮と著山上人の房に集まる。	③	8	9	0
穆亭、菅江が来る。	③	8	9	0
三三歳	③	8	9	4
一月 内山賀邸の勝賞楼に集まる。	③	8	9	6
一月 官医の安子潤宅にて宴。	③	8	9	7
一月 『麓の塵』卷二一成る。	③	8	9	7
一月 『菊寿草』刊行。	⑦	2	2	1
著山上人の七十を賀す。	③	9	0	0
吉川氏を迎えて、水戸藩の会沢氏、田中氏と湯島の酒楼にて宴。	③	9	0	2
岡田新川、礪谷滄洲、石作士幹の「莫逆編」を読み、三人に呈す。	③	9	0	5
錦江宅を訪ねる。	③	9	0	7
中神忠順の五十の賀で賦す。	③	9	0	8
王子山で遊ぶ。	③	9	1	0
美卿、子瓊と某侯の庭園をみる。	③	9	1	2
芙蓉館で井上金峨の詩を講じるのを聞く。	③	9	1	3
東奥の熊阪子彦が酒代を恵む。四溟、衡岳、穆亭と雑司が谷にて遊び、向耕亭で宴。	③	9	1	4

九月	夜、熊谷仲弼が来訪。	③	1013
	草加循仲、源孟雅と隅田川で舟遊び。	③	1003
	榊原公が久能山に行くのを送る。	③	1002
	穆亭を訪ね、衡岳を憶う。	③	1001
八月	「五派一滴図」を写す。	①	580
八月	「惺窩先生行状」を写す。	①	570
八月	『麓の塵』卷二七成る。	①	530
	徳卿の芙蓉館を訪ねる。	③	998
	草加循仲に詩を寄せる。	③	997
	岡田順之が尾張に帰るのを送り、岡田新川に詩を呈す。	③	996
	南畝宅にて会集。	③	995
	馬景徳の松琴楼にて宴。	③	990
	芙蓉館を訪ねる。	③	987
七月	『麓の塵』卷二七起筆。	①	530
七月	七夕、安子潤の一壺亭を訪ね、韻を和す。	③	986
七月	小野美卿、川伯温、錦江、吉見義方、中山生と金剛庵に集まる。	③	981
七月	『麓の塵』卷二三起筆。	①	529
六月	錦江宅で飲む。	③	978
	品川の三間屋にて宴。	③	976
	葆東生が石州に帰るのを送る。	③	975
	茶屋氏が京都へ帰るのを送る。	③	974
	滝子徳と東叡山にて遊び、東漸院を訪ねる。義竜師と泰順師に詩を贈る。	③	972
	衡岳、穆亭が熱海へ遊びに行くのを送る。	③	966
	白馬寺に行く。	③	959
	衡岳、穆亭、大久君節と耆山上人の山房に集まる。	③	958
	丹子橋、中子光、楫子敬と安子潤宅にて宴。	③	954
閏五月	『麓の塵』卷二六成る。	①	530
	芙蓉館を訪ね、井上金峨と詩を賦す。	③	947
	穆亭、錦江と都子雅宅に集まる。	③	950
	忠順とともに？翁に従つて木子荘の巢松館に集まり、詩会。	③	945
	芙蓉館に集まり詩会。	③	944
	都子雅の巢林館に集まり詩会。	③	941
五月	大島蓼太の『七柏集』に序を寄せる。	①	527
	日暮里にて遊ぶ。	③	938
	橋伯慶、井上子瓊、川伯温、川叔元、中神順次に詩を寄せる。	③	936
	東叡山で桜をみる。	③	929
三月	『かくれ里の記』を書く。	①	372
三月	『源賢法眼集』を写す。	①	579
	家で牡丹が初めて咲き、川伯温、藤伯慶、吉見義方と詩を賦す。	③	927
	鈴木猶人宅に行く。	③	923
	馬景徳の楼上で佐賀藩の石井仲車が肥前に帰るのを送る。	③	917
	山中君宅を訪ね、盆梅を賞す。	③	916
	井公亮と奥田君舟を訪ねる。	③	915

九月	尾張藩の大塚氏から「満字考」「葬礼略」を借りて写す。		19	5	6	9
九月	十三夜、土山孝之の楼にて宴。		3	1	0	1
九月	『麓の塵』卷二三成る。		19	5	2	9
	都子雅の巢林館に集まる。		3	1	0	2
	鈴章甫が三河へ行くのを送る。		3	1	0	2
十月	川伯温が酒を持つてくる。穆亭も来る。		3	1	0	2
	小石川の布施氏宅に望汰欄の主人祝阿弥、万年、文竿らと招かれる。		10	5	2	
	東作、錦江と郊行する。		3	1	0	2
	徳卿の芙蓉館を訪ねる。		3	1	0	3
	穆亭、川伯温、熊谷仲弼と郊行する。		3	1	0	3
	中子光、安子潤、藤子敬と清水太傅吉川氏の別荘で遊ぶ。		3	1	0	4
	松子長、六如上人、寛永寺の者たちと東漸院の後山にて遊ぶ。		3	1	0	4
	丹子橋、安藤言卿と安子潤宅で宴。		3	1	0	5
十一月	土山孝之から虎溪茶を贈られる。		12	3	1	
	平賀源内、山岡俊明を悼み、詩を賦す。		3	1	0	5
十二月	春町、菅江らと蔦屋重三郎に会い、大文字屋にて遊ぶ。					
一月	『岡目八目』刊行。		7	2	5	4
一月	『古今三通伝』に跋を寄せる。		18	5	2	8
一月	山内穆亭、久保百順が来訪し、酒を飲み詩を賦す。		8	3	9	
一月	内山賀邸の講を開く日に事あつて行けず。		3	1	0	6
一月	土山孝之と東山の宋松栽にて遊ぼうとするも雨で断念。酒宴。		8	3	9	
一月	土山孝之、流霞夫人に陪し勾欄にて遊び、人形浄瑠璃みる。その後、中戸楼に登り、菅江、内海、嘉十、伴七も来る。		8	3	9	
一月	夜、久保百順と赤城で遊ぶ。山下楼にて百順は於巖、余は須磨を呼ぶ。		8	3	9	
一月	菅江、嘉十、田阿、文竿とともに土山孝之、流霞夫人を陪し洲崎の望汰欄にて宴。文竿が歌妓の阿兼、阿留を連れてくる。望汰欄で東江、近藤氏、三井長年、伴七に会う。竹本住太夫も来る。		8	3	9	
一月	元木網の土碗坊を訪ねる。諸氏夷歌を賦す。会する者三十余人。		8	4	0	
一月	布施氏と夫人、金子氏、万年氏、文竿と望汰欄で遊ぶ。		8	4	0	
一月	菊池衡岳と都子雅宅に集まり、詩を賦す。帰路、百順に会い、ともに天台山で遊ぶ。三河楼で遊び、衡岳は茂与、百順は保乃、余は須磨を呼ぶ。		8	4	0	
一月	自宅にて講を開く。会する者40余人。詩を賦し、酒を飲む。		8	4	0	
一月	久保百順を訪ね、「劉阮天台に遊ぶの図」を贈られる。夜、土山孝之を訪ね、東江の揮毫をみる。		8	4	0	
一月	文竿を訪ね、羽倉右山翁と会う。翁と戯場に行く。市川団十郎をみる。帰路、東江を訪ねる。		8	4	1	

一月	夜、穆亭と衡岳を訪ね、衡岳と天台で遊ぶ。三河楼にて二女を呼ぶ。	⑧	4	1
一月	増上寺の守衛。帰路、元木網を訪ねる。また、数寄屋橋を訪ねて夷歌を賦す。会する者30余人。	⑧	4	1、1
一月	無端齋を訪ね、狂歌を詠む。夜、榊原氏を訪ね、狂歌を詠む。	⑧	4	1
一月	岡田寒泉の詩会。服部栗斎、磯田子光、山田宗俊、中神忠順、木子莊、安藤言卿と詩を賦す。	⑧	4	1
二月	五稜の楼上にて宴。「紅白花開烟雨中」の一聯を書く。	⑧	4	1
二月	文竿、万年氏、青木氏らと伊賀の臣大橋氏に陪し望汰欄にて遊ぶ。歌妓の阿仙、阿兼を呼ぶ。阿仙は唐詩ができ、唐詩を解くことを請う	⑧	4	1
二月	元淳公、叡山の某、源子光、橘生と高田の宝泉寺にて遊び、詩を賦す。阿仙が来るも留守で会えず。	⑧	4	1
二月	文竿と万年氏、金子氏に陪し中戯場にて遊び、人形浄瑠璃をみる。阿仙、阿皆、阿兼を呼ぶ。夜、稚松楼にて宴。	⑧	4	2
二月	土山孝之、流霞夫人と品川にて遊び、三間亭で宴。嘉十、菅江、田阿も来る。	⑧	③	1
二月	都子雅の巢林館の集い。穆亭、錦江と詩を賦す。	⑧	③	1
二月	樋口元良宅にて宴。清に漂流した篁工吉二郎に会う。	⑧	③	1
二月	土山孝之、流霞夫人と沢田東江宅にて宴。妓をみる。	⑧	③	1
二月	寒泉、忠順、石井子彭、赤松大経、磯田仲馨と服部栗斎の信古堂に集まる。	⑧	③	1
二月	庚嶺阪の安藤言卿の詩会。衡岳、忠順、立子、寒泉、安子潤と詩を賦す。	⑧	④	1
三月	土山宅にて曲水の宴。菅江、嘉十、三井氏と酒を飲む。歌妓の阿加与も来る。夜、席を逃れて万年氏を訪ねる。布施氏、青木氏、長滝氏、文竿、阿仙、阿兼も同席。酔って文竿宅に泊まり、明け方に帰る。	⑧	④	1
三月	宿醉だが望汰欄にて遊ぶ。五稜子と望汰欄に泊まる。	⑧	④	2
三月	洲崎の弁天神社に行く。望汰欄に帰ると文竿が来る。主人の祝阿弥と鶴岡八幡宮の神宝をみるために深川八幡宮に行く。	⑧	④	2
三月	小野美卿の華燭の賀会。	⑧	④	3
三月	土山氏、菅江、嘉十と吉原にて遊ぶ。大文字屋に登楼し、土山氏は誰袖、菅江は袖芝、余は一炷。	⑧	④	3
三月	菅江と書肆蔦屋重三郎のもとで宴。午後には駕籠で帰る。	⑧	④	3
三月	土山孝之、流霞夫人、菅江、嘉十、文竿と望汰欄で遊ぶ。歌妓の阿直、阿兼を呼び潮干狩りをする。東江、滝口氏、杉浦氏も来る。	⑧	④	3

三月	都子雅の巢林館で詩会。	⑧	4	3
三月	土山氏を陪して、朱楽菅江、嘉十と滝口氏宅にて宴。歌妓の阿皆、阿銀も来る。	⑧	4	3
三月	中神忠順、岡田寒泉らと練馬村にて遊び、菓を採る。	⑧	4	3
三月	土山宅にて初鯉を食べる。	⑧	4	3
三月	土山宅にて飲む。夜、万年氏を訪ねる。文竿、金子氏も同席し、神門の諸君に会う。歌妓の阿仙、阿兼、阿安、阿文も同席。	⑧	4	3
	歌妓阿仙に詩を贈る。	③	1	0
	都子雅宅で藤をみる。	③	1	0
	諸子と洲崎で遊ぶ。	③	1	0
四月	土山孝之、流霞夫人、菅江、嘉十と舟で牛島にて遊び、中田(葛西太郎)にて宴。谷風、駒谷も来る。吉原の若菜楼に泊まる。	⑧	4	3
	芙蓉館で東江の「三都の賦」の書をみる。	③	1	0
	芙蓉館で金峨氏に詩を贈る。	③	1	0
	岡田寒泉、中神忠順、諸子らと郊行する。	③	1	0
	練馬の内田氏の園亭を訪ねる。	③	1	0
	大田錦江に詩を寄せる。	③	1	0
	孝女曾与の伝をよむ。	③	1	1
	膝童子に詩を寄せる。	③	1	1
四月	『麓の塵』卷三一起筆。	③	1	1
四月	平秩東作が旅立つ際に狂歌一首。	①	1	2
四月	『一話一言』卷五成る。	⑫	2	3
	岡田寒泉、木子荘、中神忠順が蓮花寺に集まると聞くが病で行けず。	③	1	1
	『三春行楽記』を記す。	③	1	1
五月	病臥。諸子の木子荘の巢松館に集まると聞いて、詩を寄せる。	③	1	1
	山内穆亭と高田馬場にて遊ぶ。	③	1	1
	山内穆亭が清風館に着山上人、岡部四溟、菊池衡岳を招くが、着山上人来られず。	③	1	1
五月	『麓の塵』卷二九成る。	①	1	1
五月	『麓の塵』卷三一成る。	⑫	5	3
七月	鈴木徳卿を訪ねる。	③	1	1
	菊池衡岳を訪ねる。	③	1	1
	菊池衡岳と岡部四溟のもとを訪ねる。	③	1	1
	「壬寅中村座秋狂言」の狂詩をつくる。	①	4	6
	鈴木徳卿宅にて月を賞す。	③	1	1
	十四夜に酔月楼にて宴。	③	1	1
	十五夜に酔月楼にて宴。	③	1	1
	本多氏、三上氏、巖本氏、中野氏に陪し鈴木徳卿の芙蓉館に集まる。	③	1	1
九月	事があつて中神忠順と岡田寒泉宅にて茉莉花を賞することができず。	③	1	1
九月	岡田寒泉、服部栗斎、中神忠順と木子荘の愛日楼に集まる。	③	1	1
十月	吉田蘭香と市川団十郎宅を訪ね、海老蔵襲名の狂歌を贈り、『江戸花海老』に記す。	①	1	1
	『江戸花海老』刊行。	①	8	9
	『福笑』刊行。			
	『玉手箱』刊行。			
	『和漢同詠』刊行。	⑦	1	4

一月	『万載狂歌集』刊行。	三五歳	①	2、17
一月	『めでた百首夷歌』刊行。		①	70
一月	『通詩選笑知』刊行。		①	432
一月	元旦に詩を賦す。		③	1138
一月	年はじめの狂歌一首。		②	390
一月	立春。狂歌二首。		②	390
一月	五明楼にて遊ぶ。「きのふから」の狂歌を詠む。		②	391、⑩
一月	京ばし会に出席し、「子日琴」の題で二首詠む。		4	699
一月	花道つらねに「小本から」の狂歌を贈る。		②	391
一月	『画本綺麗扇』の題を草す。		⑬	530
一月	『閑栖劇話』に序を寄せる。		⑬	530
一月	吉原細見『澁都洒美選』に序と跋を寄せる。		4	098、⑬
	五明楼墨河を訪ねる。		③	1141
	夜、朱楽菅江、久保百順と隅田川で舟遊び。		③	1143
	金竜山浅草寺に行く。		③	1145
	『話句翁』に序を寄せる。		⑬	185
	『浜のきさご』に序を寄せる。		②	463
二月	吉原細見『五葉松』に序を寄せる。		①	195
二月	山手白人に狂歌を贈る。		②	392
二月	初午の狂歌一首。京町大文字屋の狂歌一首。		②	393
三月	母の六十賀会。「老木花」「寄袋祝」の狂歌二首を詠む。		5	807、⑬
三月	『老來子』の序を草す。		⑬	531
四月	中根邸に招かれ「時しらぬ」の狂歌一首。		②	401
四月	竹杖為軽（森島中良）主催の宝合会を欠席。『狂文宝合記』に跋を寄せる。		⑬	532
四月	御殿山にて狂歌二首。		②	403
五月	中神忠順、井公亮と木子荘の愛日楼で宴。		③	1148
五月	花道つらねに狂歌二首贈る。		②	405
五月	子子孫彦の狂歌会。「曾我祭雨」「茶屋逢恋」の狂歌二首。			
五月	『狂歌すまひ草』の序を撰す。		②	455
五月	豊竹座竹本春太夫の「ひらがな盛衰記」を聞いて狂歌一首。		②	409
五月	梅旭女を訪ねる。		②	409
六月	馬喰町で狂歌会。「西瓜立売」「寄花火恋」の二首を詠む。		②	411
六月	横井也有没す。			
六月	雲楽斎の四谷の別荘にて「寄馬神祇」「別荘納涼」の二首を詠む。		②	411
七月	七夕、狂歌一首。		②	413
七月	平秩東作撰『狂歌師細見』に跋を寄せる。		②	452
八月	『猿山庭訓往来』に序を寄せる。		⑬	529
八月	赤松連初会。「寄小石川祝」の一首。		②	414
八月	浜辺黒人撰『狂歌猿のこしかけ』に序を寄せる。		⑬	531
九月	十三夜に狂歌二首。		②	417
九月	神田明神の宵祭に狂歌一首。		②	417
九月	神田祭の狂歌五首。		②	417
九月	吉田蘭香邸で家橘に会う。狂歌一首。原夏若、誌仲らが同席する。狂歌三首。		②	418

天明四年(一七八四)

九月

家橋が来訪し、橘太夫元家と付ける。狂歌一首。夜に豊岡太守(京極甲斐守高品)の前で浄瑠璃をきく。狂歌二首。

青松寺の後山に登る。

『観海先生集』刊行。

岡田新川が尾張藩校明倫堂の都講に任じられるのを賀す。

京極高品の席上で詩を詠む。

十月

十月の家事を思い出し狂歌を詠む。

十一月

小松川鷹狩りの狂歌を詠む。

十二月

雪が降り、狂歌を詠む。

「三十五になる年のくれに」の狂歌を詠む。

浅間山噴火を詠んだ狂歌一首。

『楊柳桜草』に跋を寄せる。

『源平総勘定』刊行。

『吉原燈籠評判記』刊行。

『飛花落葉』刊行。

元旦に詩を賦す。「としのはじめに」の狂歌二首、「吉原歳旦」、「深川歳旦」の狂歌を詠む。

一月

狂歌一首。

『老葉子』刊行。

『通詩選』刊行。

『檀那山人藝舍集』刊行。

一月

『金平子供遊』の序を草す。

『彙軌本紀』の序を寄せる。

一月

『太平楽巻物』に序を寄せる。

『加保茶元成春帖手鑑』に序を寄せる。

山東京伝画『新吉原美人合』に序を寄せる。

麗沢楼に集る。

閏一月

「閏月歳旦」の狂歌を詠む。

閏一月

狂歌一首。

南畝宅に集る。

大田錦江、広子純、井子静、吉見義方と榊原士立を訪ねる。

大田錦江、広子純、井子静、吉見義方と吉見義方と江古田で遊ぶ。

吉原にて遊ぶ。

「豊年初午」、「初午」の狂歌を詠む。

二月

大雪の狂歌一首。

「中島氏の昇進を賀す」の狂歌を詠む。

三月

狂歌一首。

菊池衡岳らと井子静の継塵館にて詩会。

菊池衡岳らと広子純の逍遙館にて詩会。

隅田川にて舟遊び。八首つくる。

井子静宅にて筍を食べる。

酒上熟寝没す。

五月

堀保己一から『榊巷談苑』を借り写す。

五月

『麓の塵』卷三三成る。

広子純、井子静、大田錦江、井上子瓊、榊原士立、弟の栄名、吉見義方と舟遊び。

菊池衡岳と西郊にて遊ぶ。

② 4 1 9

③ 1 1 5 8

③ 1 1 6 0

③ 1 1 6 3

③ 1 1 5 9

③ 4 2 1

② 4 2 5

② 4 2 5

② 4 2 5

② 4 2 5

② 4 7 3

② 5 3 3

I

I

I

② 4 2 7

② 4 2 7

③ 4 2 7

③ 4 2 7

⑦ 4 3 2

⑦ 5 3 0

② 4 2 7

② 5 3 4

② 5 3 4

② 5 3 4

① 1 4 4

① 1 8 3

① 5 3 4

① 1 9 7

① 1 4 4

③ 1 1 6 7

② 4 2 9

② 4 3 0

② 4 3 0

③ 1 1 6 8

③ 1 1 7 0

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

③ 1 1 7 1

天明七年（一七八七）

八月	お賤を加保茶元成（吉原大文字楼主）の別荘逍遥楼にうつす。狂歌一首。		②	508
九月	「九月尽」の狂歌一首。		②	508
十月	東叡山瑠璃殿にて百光明供を修理するのを見る。		③	1335
十月	狂歌一首。		②	508
閏十月	狂歌二首。		②	509
十二月	「別荘節分」の狂歌一首。		②	509
十二月	増築中の離屋を巴人亭とする。		①	155、
			④	77
	逍遥楼に泊まる。		③	1336
	黄表紙『手練いつはりなし』刊行。		I	
	高橋等正の七十賀歌を詠む。		⑬	602
	『古今狂歌袋』に序を寄せる。		⑬	539
	『絵本八十字治川』に序を寄せる。		⑮	540
一月	元旦詩を賦す。	三九歳	③	1338
一月	『狂歌才蔵集』刊、和文序を草す。		①	39
一月	『通詩選諺解』刊、序を草す。		①	477
一月	『狂歌千里同風』刊、和文序を草す。		①	63
	吉原細見に序を寄せる。		②	451
	『新発幸大寺不実録』に序を寄せる。		⑮	540
	『松楼私語』をまとめる。		⑩	11
二月	「辺越方人をいためることば」を草す。		①	170
	南畝宅に会集。		③	1340
	両国橋辺の霊亀楼で行われた山崎翁の八一の賀会に出席。		③	1341
三月	山道高彦（馬蘭亭）・窪田徳左衛門（巻藁射久）・榊原士立（日蔭葎）と染井山荘の柳沢米翁を訪れ、六義園を見る。		③	1343
	飛鳥山に遊ぶ。		③	1344
五月	『野夫鑑』に序を寄せる。		①	190
	春日部錦江と飲酒。舟遊。		①	348、
七月	井上子瓊・鈴木猶人に所懐を示す。春日部錦江に手紙を書く。		①	351、
八月	山手白人没す。五一歳。		I	
八月	夜、菅江・橘洲・雅望・真顔らと庵崎に虫聞きの狂歌会。翌年『画本虫撰』として刊行。		II	292
八月	詩八体を賦す。隅田川・品川にて月を賞す。		①	366、
八月	『一話一言』巻九起筆。		⑫	386
九月	大島蓼太没す。七一歳。		I	
九月	登山。		③	1370
九月	六義園にて遊ぶ。		③	1372
九月	十三夜の月をみる。		③	1373
	岡田順之が尾張に帰るのを送る。		③	1374
	巢鴨に遊び、菊を観る。		③	1376
九月	錦江と酒家に飲む。		③	1378
十月	五世市川団十郎が立寄り、暫の大字と狂歌を書き付ける。		⑩	49
十一月	吉原全焼。「かりまくら」を草す。		⑩	48
	井子熙（井上春蟻か）と酒楼に飲む。		③	1379、

天明八年（一七八八）

	高須藩家老らと下大夫永井氏の池亭で宴。		③ 1 3 8 1
	夜、錦江と酒家に飲む。		③ 1 3 8 3
	井子熙の臨海楼に題詩を寄せる。		③ 1 3 8 5
	椿井氏の席上、京都酬恩庵主に贈詩。		③ 1 3 8 6
	藤子徳が久能山に行くのを送る。		③ 1 3 8 8
	柳川侯（立花鑑通）の六十を賀す。		③ 1 3 9 3
十二月	立春、伊庭子徳、南畝を訪問、ともに墨水春なる酒を酌みかわす。		③ 1 3 9 5
	『鶉衣』刊。序を寄せる。		① 1 9 4
	『麦生子』の序を草す。		② 5 2
	狂歌仲間と交わりを断つ。		① 6 2
一月	元旦詩を賦す。	四〇歳	③ 1 3 9 7
一月	『東風詩草』の序を草す。		⑥ 2 1 4、
一月	『麓の塵』卷四三起筆。 自宅にて小集。		② 9 9
一月	『遊郭詩草』の題言を作る。		⑥ 2 8 5
一月	酒井抱一の館で宴。		③ 1 4 0 0
一月	『四方のあか』刊行。		① 5 4 5
一月	沼元之の父の七〇を賀し五言古詩を賦す。 自宅にて小集。藤是徳に詩を寄せる。		③ 1 4 0 3
二月	芭蕉の一句を訳す。		② 8 7
二月	諸子とともに「訳文の会」を行う。		③ 1 4 0 9
二月	名見崎大喜より、昨年作った狂歌と言葉書を見せられ、「晦日の月」と名付ける。		⑩ 4 7
二月	自宅小集、熊阪台州の送り来る不二石の引を作る。		⑥ 2 1 8 8
二月	佐賀の石井仲車来る。		③ 1 4 1 2
二月	石井仲車を迎え麴町の鶴巢亭にて宴。赤崎彦礼・稻垣恵明・鷹見星阜・荻野鳩谷・馬景徳・辺道老・岡故完・原子文・井上子瓊・鈴木猶人・春日部錦江ら来て会う。席上、赤崎彦礼に詩を贈る。		② 9 3
二月	山木氏の早稲田の別業を訪れ「稲雲園記」を草し、詩「十二詠」及び「夷曲十二首」を詠む。		① 4 3 1
二月	南畝宅に石井仲車の帰国送別宴を開く。また、僧雪山の西遊を送る。		① 4 2 0 3、 ③
二月	『熊沢先生行状』末に草加十郎より贈られた旨を記す。		① 4 3 1 9、 ⑥
二月	飯田町の万屋と共に浅草鳥越伊勢屋源右衛門所蔵の古書画を見、雪山人の書を贈られる。		① 4 3 6 9
三月	誕生日を祝う。		③ 1 4 3 4
	錦江と自由軒にて飲酒。席上、自由軒主人上方に出立。		③ 1 4 3 5
	臼杵の成水氏園中臥竜梅に寄せ題詩を作る。		③ 1 4 3 8
	香山の詩に和す。		③ 1 4 3 9
	伊庭子徳とともに郊行。		③ 1 4 4 0

三月	小集。曲水詩を作り、護国寺にて花を賞す。	③	1	4	4	2
三月	『忠女福伝』に序を寄せる。	⑬	5	4	4	1
三月	小集。	③	1	4	4	5
四月	尾張の人某、藤井春なる酒を南畝に贈る。小集。毛詩講義の竟宴。	③	1	4	4	8
四月	御小納戸頭高井大隈守実員の小普請奉行に なるのを賀す。	③	1	4	4	7
五月	平山氏の七〇を賀す。	③	1	4	5	3
五月	伊勢の西村節甫の父七〇、母六一を賀し寿詩をつくる。	③	1	4	5	4
五月	命を受け校書を掌る。	③	1	4	5	5
五月	耆山上人の山房を訪問。	③	1	4	5	8
五月	午睡翁の夢を見る。	③	1	4	5	9
五月	紀貫之の蟻通神を過ぐる図に題詩を作る。	③	1	4	6	0
五月	『麓の塵』卷四三成る。朱墨を附し終わる。	⑬	5	3	8	
五月	栗士弘十三回忌、詩を詠む。	③	1	4	6	1
五月	『麓の塵』卷四四起筆。	⑬	5	3	8	
五月	『麓の塵』卷四四成る。	⑬	5	3	8	
五月	大江丸著『北陸道名勝画図』に序を寄せ る。	⑬	5	4	2	
六月	榊原士立の草津温泉に遊ぶを送る。	③	1	4	6	5
六月	『麓の塵』卷四八起筆。	⑬	5	3	9	
六月	『一話一言』卷九擲筆。	⑫	3	8	6	
六月	『国本論』を写す。	⑬	5	4	5	
六月	源益之の甲斐に帰るのを見送る。	③	1	4	6	6
六月	『一話一言』卷十成る。	⑫	4	2	5	
六月	『俗耳鼓吹』の序を草す。	⑩	1	5		
六月	『吉原丸鑑』の刊年を考証し、卷一に記す。	⑬	6	9	7	
七月	『俗耳鼓吹』を擲筆。	⑩	5	7		
七月	植木宣胤著『羽譜』序を撰す。	⑱	5	4	2	
七月	『麓の塵』卷四八成る。	⑱	5	3	9	
七月	『一話一言』卷十一起筆。	⑫	4	7	2	
八月	『太閤秀吉出生期』を瀬名貞雄より借り写す。	⑫	4	8	7	
八月	市村羽左衛門より来簡、顔見世興行を知ら される。	⑩	4	9		
八月	『小右記』を写し始める。	⑱	5	4	0	
八月	『小右記』長徳まで終える。	⑱	5	4	0	
八月	『鸚鵡言』を写す。	⑱	5	6	3	
八月	『一話一言』卷十二起筆。	⑫	5	1	3	
八月	金鶏道人の詩を寄せ来るに和す。	③	1	4	6	9
八月	間島守雌宅を通り、萩の花をみる。	③	1	4	7	3
八月	普門院主満、阿波の使者に従つて南海に行 くのを送る。	③	1	4	7	4
八月	愛宕山に登る。	③	1	4	7	5
八月	樋口元良の新居を訪問。	③	1	4	7	6

天明九年・寛政元年
(一七八九)

四月	官田惟孝宅にて酒を飲み、詩会。		1544	④1534
	膝是徳の六十の賀詩をつくる。			④1533
	再び墨水で桜をみる。			④1530
	十千亭主人と墨水で遊び桃花をみる。			④1529
	東叡山で花を賞す。			④1528
	飛鳥山で花を賞す。			④1527
	金輪寺で花をみる。			④1526
	護国寺で花を賞す。			④1525
	浄栄寺の垂糸桜棠に詩を寄せる。			④1524
	常円寺の垂枝桜棠に詩を寄せる。			④1521
三月	平秩東作没する。六四歳。			⑬1548、I
	書く。			④1518
	玉田氏母の八〇を賀し「王母図」に題詩を			③1494、
	築紫氏の北陸巡検を送る。			④1510
一月	葛西方面に郊行。			④1509
	夜、井上子瓊の長松館にて宴。			④1508
	芙蓉館にて詩会。			1505
一月	南畝宅にて会集。			④1503
	立春、芙蓉館を訪問。			④1502
一月	伊庭子徳と酒を飲む。			④1498
	父の墓参りに行く。春日部錦江が酒を持つて来る。	四一歳		1497
十二月	『三議一統之弁』を瀬名貞雄より借り写す。			④1496、
十一月	中神忠順没する。五七歳。			④1498
十一月	橋南溪の『西遊記』を抄出。			⑬1506
十一月	内山賀邸没する。六六歳。			⑬1548
十月	『祭儀略』『喪儀略』を写す。			⑬1548
十月	『一話一言』卷十四起筆。			⑬1596
十月	瀨名貞雄蔵の『日野掛燈図』『阿蘭陀楽器図』を天野布川に写させる。			⑬1591
九月	尾張の馬文翼、詩を送り来る。			⑬1489
九月	本念寺にて日什記を読む。			⑬1488
九月	平野氏大坂に行くのを送る。			⑬1489
九月	十千亭主人より『盍徹問答』を借り写す。			⑬1550
九月	父・正智病死。七三歳。本念寺葬。			⑬1744、⑳
九月	本念寺にて「蓮祖四厄図」をみる。			37、I
九月	濱御殿にて関兵、烽火をみる。			⑬1479
九月	古山子文に詩を示す。			⑬1478
	武州豊島郡新倉村の鈴木氏の園中竜陰松に題詩を寄せる。			⑬1477

寛政二年（一七九〇）

四月	東海道へ行く春日部錦江を送る。 角筈で遊ぶ。						④	1	5	4	5
五月	甘露門で会集。						④	1	5	4	8
五月	『小右記』二八より三一までの抄書起筆。						④	1	5	4	1
五月	『永仁御即位注進状』弘文院本の写本から写す。						④	1	5	4	6
五月	『一話一言』卷十二攔筆。						④	1	5	1	3
六月	藤是徳宅にて酒を飲む。						④	1	5	5	8
六月	甘露門にて会集。						④	1	5	5	9
六月	『麓の塵』卷五八起筆。						④	1	5	4	1
閏六月	『麓の塵』卷五八成る。						④	1	5	4	1
閏六月	同書卷五九起筆。						④	1	5	4	2
七月	『麓の塵』卷五九成る。						④	1	5	4	2
七月	七夕、官田惟孝宅にて会集、詩会。						④	1	5	6	0
八月	市ヶ谷光徳院の武州川口錫丈寺開帳を見物、聞書を記す。						④	1	5	6	0
九月	『麓の塵』卷六一起筆。						④	1	5	4	2
九月	『踏霜詩草』の序を書く。						④	1	5	3	0
十月	松岡辰方より「水嶋伝左衛門家伝」を贈られる。						④	1	5	3	2
十月	『麓の塵』卷六一成る。						④	1	5	4	2
十月	『次韻踏霜詩草』に序を寄せる。						④	1	5	4	3
十月	『大学鈔稿』に序を寄せる。						④	1	5	4	4
十一月	嚶鳴館に詩会があるも事あつて行けず。						④	1	5	4	4
	菊池衡岳を訪問。						④	1	5	6	7
	雪の中、白馬台にのぼる。						④	1	5	6	8
十二月	岡田新川、詩を寄せるに和す。						④	1	5	6	9
	『南畝叢書』三部四冊刊。						④	1	5	7	0
	『神巷談苑』の序・跋、『藤樹先生年譜』						④	1	5	7	0
	『東海談』の序を書く。						④	1	5	7	0
	『鶉衣』後編刊行。						④	1	5	7	0
一月	元旦詩を賦す。						④	1	5	7	1
一月	芙蓉館にて会集。						④	1	5	7	1
一月	石川雅望著『通俗醒世恒言』に序を寄せる。						④	1	5	7	1
	南畝宅にて詩会。						④	1	5	7	2
	十千亭主人と江東にて遊ぶ。						④	1	5	7	2
							④	1	5	7	2
	鈴木徳卿の芙蓉館にて初めて大田錦城に会い、詩を贈る。						④	1	5	7	2
	鈴木徳卿・井上子瓊・鈴木猶人と西郊に遊ぶ。						④	1	5	7	2
							④	1	5	7	2
	麴町の鶴巢楼にて佐賀藩儒石井仲車の別宴に参加。出席は頼春水・樺島石梁・菊池衡岳・鷹見星阜・稲垣恵明・西川国華・井上子瓊・菊池博甫・馬景徳。						④	1	5	7	2
	再び石井仲車の送別宴が邸舎で行われ、席上で仲車より崑崙の硯を贈られる。						④	1	5	7	2
二月	東叡山で花見。						④	1	5	7	2
二月	浅田又兵衛より『斉藤亜相正義公由来』を贈られる。						④	1	5	7	2
	馬景徳と樹王山成就院で遊ぶ。						④	1	5	7	2

八月	春日部錦江、酒饌を携え来訪。	④	16887
八月	井上子瓊・鈴木猶人・春日部錦江・僧雪山とともに宮田惟孝宅に集まり、詩会。	④	16885、
八月	『燭夜文庫』に跋を寄せる。	⑧	546
七月	『二大家風雅』刊。	①	522、1
七月	間島守雌の市ヶ谷の邸舎に会集。萩花をみる。	④	1678
七月	病臥。	④	1671
七月	七夕にひとり酒を飲む。	④	1667
七月	朝顔を見る。	④	1668
七月	夜、芙蓉館にて会集。医師半井慶雲（和氣君人）とともに詩を賦す。	④	1670、9
七月	磯谷滄洲・岡田順之・春日部錦江・栄広子・僧示詮。	④	1674、
七月	尾張藩間島守雌の一柱館にて詩会。出席は磯谷滄洲・岡田順之・春日部錦江・栄広子・僧示詮。	④	1666
六月	舟を浮かべる	④	1663
六月	『左伝』を講じた後、詩宴。	④	1662
六月	鈴木徳卿・井上子存・鈴木猶人と不忍池の蓮をみる。	④	1655、10
六月	『一話一言』巻十四成る。	⑬	96
五月	浜辺黒人没する。七八歳。	I	
五月	春日部錦江、酒を携え来訪。	④	1649
五月	膝是徳のもとに集つて『爾雅』を読む。	④	1648
四月	井上子瓊宅に『十八史略』を講じ、竟宴。	④	1645
四月	鈴木徳卿・大田錦城・井上子存・井上子瓊・鈴木猶人と木下川で舟遊び。平井にて鯉ドウという漁具を見つけ、これを『一話一言』に書く。	④	1636、
三月	十千亭主人と西原にて遊び、牡丹をみる。	④	1625
三月	浄栄寺海公・僧雪山・春日部錦江・佐幅卿らと林梅院にて遊ぶ。	④	1624
三月	夜、延岡大夫内藤氏宅にて宴。席上、三輪花信齋に詩を寄せる。	④	1622、
三月	夜、鈴木徳卿の芙蓉館にて鈴木猶人と賦詩。	④	1618、
三月	ひとり染井に遊び、花見。	④	1616
三月	榊原士立と柏木村円照寺で花見。	④	1615
三月	三光院で花見。	④	1614
三月	飛鳥山で花見するも、すでに花散る。	④	1612
三月	感応寺で花見。	④	1613
三月	瀑布川で花見。	④	1611
三月	護国寺で花見。	④	1610
三月	十千亭主人と金輪寺にて遊び、花見。	④	1609
三月	『麓の塵』巻四七起筆。	⑬	539
三月	鈴木徳卿・井上子瓊と鈴木猶人宅を訪ね、山茶花を賞す。	④	1607、
三月	白山で花見。	④	1606
三月	護国寺で花見。	④	1605
三月	西光寺で山桜などを花見。	④	1604
三月	来福寺で花見。	④	1603
三月	十千亭主人と御殿山で遊び、花見。	④	1602
三月	飛鳥山で花を賞す。	④	1599

寛政五年（一七九三）

伶人岡氏の六十を賀す。

④ 1815

甘露門にて酒を飲む。

④ 1824

上野の東叡山にて観梅。

④ 1830

高田馬場で流鏑馬をみる。

④ 1833

「禅院二十五点図」を写す。

④ 1839

花見。

④ 1841

甘露門にて会集、詩宴。

④ 1841

葛屋重三郎の母の墓碑銘を撰す。

④ 1841

『一話一言』卷十七成る。

④ 1841

葛谷にて遊ぶ。

④ 1841

長静斎を訪問。

④ 1841

松鶴図に題し母の七十を賀す。

④ 1841

お賤没する。三〇歳。その墓碑銘を撰す。

④ 1841

小野美卿宅にて酒を飲む。

④ 1841

長静斎を訪問。

④ 1841

法住寺を訪問。

④ 1841

佐賀藩中屋敷の石川良弼宅舎に会集。

④ 1841

浅草の茶店の美人図に題詩をつくる。

④ 1841

両国、高島お久の図に題詩をつくる。

④ 1841

児玉某・篠本竹堂と堀口幽谷の待清居にて会う。

④ 1841

八月

④ 1841

八月

④ 1841

八月

④ 1841

宿直。

④ 1841

自由軒の西遊からかえる夢をみる。

④ 1841

瀬名貞雄宅にて詩を賦す。

④ 1841

大久保西山蔵の「大石内蔵助良雄系図」を借り写す。

④ 1841

菊池博甫の子お定と散策。

④ 1841

水戸の長久保赤水に会い、その松月亭に題詩を寄せる。

④ 1841

正燈寺にて胡枝花をみる。

④ 1841

飛騨高山の今日庵に題詩を寄せる。

④ 1841

十三夜に詩を詠む。

④ 1841

山東京伝の新たに煙草袋屋を開くと聞き、詩を贈る。

④ 1841

丹丘子・春日部錦江とともに山内穆亭宅にて会い、昔話に興じる。

④ 1841

瀬名貞雄より、「伊奈系図」を借り写す。

④ 1841

大久保西山より『隣交始末物語解』を借り写す。

④ 1841

『関宿伝記』を今泉政隣より借り杉田信義に写させる。

④ 1841

甘露門にて酒を飲む。

④ 1841

『一話一言』卷十八起筆。

④ 1841

二月三日に学問吟味のため、井上作左衛門・鈴木猶人・中神順次・中神悌三郎と共に聖堂に出頭するように命じられる。

④ 1841

鹿都部真顔に四方の号を譲り、「狂歌堂に判者をゆづること葉」を草す。

④ 1841

受験者惣代として井上作左衛門が連名の手札を持参、与頭衆のもとへ出向く。

④ 1841

寛政六年（一七九四）

一月

四六歳

④ 1841

二月三日に学問吟味のため、井上作左衛門・鈴木猶人・中神順次・中神悌三郎と共に聖堂に出頭するように命じられる。

④ 1841

鹿都部真顔に四方の号を譲り、「狂歌堂に判者をゆづること葉」を草す。

④ 1841

受験者惣代として井上作左衛門が連名の手札を持参、与頭衆のもとへ出向く。

④ 1841

二月

④ 1841

二月三日に学問吟味のため、井上作左衛門・鈴木猶人・中神順次・中神悌三郎と共に聖堂に出頭するように命じられる。

④ 1841

鹿都部真顔に四方の号を譲り、「狂歌堂に判者をゆづること葉」を草す。

④ 1841

受験者惣代として井上作左衛門が連名の手札を持参、与頭衆のもとへ出向く。

④ 1841

二月	五つ時前、聖堂へ出頭、学問吟味を受け る。この日のことを「初場即時」の題で七 律に賦す。	6	6	6	6	5	8
二月	鈴木猶人と共に二二日に聖堂に出頭するよ う与頭衆より廻状届く。	17	6	6	6	6	3
二月	猶人と共に与頭衆へ御請に出向く。この 日、二四日の三次試験の廻状届く。	6	7	6	6	6	4
二月	猶人・瀬名伝右衛門組の御徒新楽郷右衛門 と共に聖堂へ出頭、二次の吟味を受ける。 岡田寒泉・紫野栗山も見回る。	17	6	6	6	6	4
二月	藤堂土佐守組の金子半五郎・原田寛藏と共 に二七、八の両日聖堂へ出頭するように命 じられる。	17	6	6	6	6	7
二月	五つ時前、井上・鈴木・中神順次・中神悌 三朗と共に聖堂へ出頭、三次の吟味を受け る。	17	6	7	2		
二月	五つ時前聖堂へ出頭、四次の吟味を受け る。	17	6	7	8		
二月	五つ時前聖堂へ出頭、五次の吟味を受け る。	17	6	8	1		
三月	昨日、書き物を提出するよう命があつたこ とを聞き「応?詩」を認め提出する。	17	6	8	4		
三月	明日、林大学頭の面談ある由を与頭衆から 聞く。	17	6	8	4		
三月	五つ時前、林大学頭に出頭。	17	6	8	4		
三月	『常語藪』に序を寄せる。	18	5	4	8		
三月	『本朝刀剣略記』を嵯川氏より借り写す。	19	5	5	1		
四月	着山上人没す、八三歳。	17	6	8	4		
四月	御目付衆より「病気差合、名改等無之候 哉」の旨をたずねられる。	17	6	8	4		
四月	御徒頭より明日四つ時に井上作左衛門・鈴 木猶人・中神順次と共に登城すべき旨の命 を伝えられる。	17	6	8	5		
四月	御徒頭神尾市左衛門同道で登城、学問出精 一段のことにつき銀子十枚を下賜され、老 中・若年寄りに御礼回りをする。	6	8	4	3		
四月	諸氏と稲付村静勝寺に遊び寺主に請うて 「道灌公略譜」を写す。	19	6	0	5		
四月	『科場窓稿』成る。	17	6	5	5		
五月	池田正樹蔵「飛騨国白河籠之渡図」を写 す。	19	6	9	1		
六月	池田正樹蔵「玉箒図」坂本と「出雲国佐陀 宮竜蛇図」を写す。	19	6	9	2		
六月	「池田氏筆記」を書留める。	16	5	1			
六月	池田正樹蔵「越中国正明川藤之釣橋図」 「楠正行碑」を定吉に写させ、「大阪城南 蛮甲冑図」「福州官升図」「細男図」を写 す。	6	9	4			
七月	「一話一言」卷十九起筆。	13	2	6	2		
七月	「麻囊図」を写す。	19	6	9	2		
七月	吉田篁墩より『近聞寓筆』巻一を借り写 す。	19	5	7	1		
七月	『一話一言』卷十八擱筆。	13	2	3	5		
七月	「武家諸法度之奥書」を写す。	19	5	4	5		

寛政七年（一七九五）		寛政八年（一七九六）	
七月	林政賢没す。ほどなくして墓碑名を撰す。		18 6 0 9
八月	『藤樹先生行状并附録』を今井官助より借り写す。		19 6 0 3
八月	『小弓の御所様御討死軍物語』を写す。		19 6 9 9
九月	辻知篤を介し某家蔵『漂流記』を借り写す。		19 6 7 0
九月	『駿牛絵詞』を朱書もそのままに写す。		19 5 8 3
九月	『権現様上意ニ付相国寺諸院領配分帳』を蟠川家より借り写す。		19 6 1 3
十月	蟠川親常より「蟠川家古文書」を借り写す。		19 6 0 1
十月	御徒頭小笠原平兵衛の尋に応じ「上野中堂御成之事」を書出す。		15 2 5 9
十月	塙保己一より「高嶋里阿弥陀寺壊弁縁起」を借り写す。		19 5 8 7
十一月	蟠川氏蔵「千葉五郎胤道旗図」を借り写す。		19 6 9 2
閏十一月	『東鑑異本考』の榊原長俊自筆本を借り写す。		19 5 5 1
十二月	瀬名貞雄より『事跡合考』を借り写す。		19 7 0 0
十二月	『一話一言』巻十九攔筆。	四七歳	13 2 6 2
一月	『周礼』第三冊講習を終える。		10 5 4 1
四月	「鶴岡八幡宮古文書」を秦櫛麿より借り写す。		19 7 0 0
四月	將軍家斉の浜御殿相撲上覧に従行。（『徳川実紀』には寛政六年四月九日）		13 2 8 0
四月	「三州大樹寺図」を木島氏より借り写す。		19 7 0 0
四月	『邏媽人款状』を大久保流徳より借り写す。		19 6 6 8
四月	「松前御対応対行列之覚」を大久保流徳より借り写す。		19 6 6 9
四月	平秩東著作『？野茗談』に題名を寄せる。		18 7 0 1
七月	『祖翁巾』に序を寄せる。		2 4 4 8
七月	瀬名貞雄蔵「ハルシヤ馬図」を写す。		19 6 9 2
七月	近藤正斉蔵『台湾兵乱記』を借り写す。		19 6 7 1
八月	藩中より『戸山御庭記』を借り写す。		19 5 5 4
八月	『国朝大業広記』を写す。		19 6 9 4
八月	「將軍家御馬印図」を写し、また「紫檀初生図」を蟠川氏より借り写す。		19 5 9 0
九月	『土木古城再興伝来記』を秦櫛麿より借り写す。		19 5 9 0
九月	越川氏蔵『玉藻前』を島田氏より借り写す。		19 5 8 7
十月	「大橋長左衛門尉家系」を写す。		19 6 0 2
十一月	『於呂志屋国之事』を原田氏より借り写す。		19 6 6 9
三月	『本化高祖紀年録』に序を寄せる。	四八歳	18 5 4 9
三月	伊庭子徳没す。		19 7 0 8
三月	吉田篁墩より『乾隆六十年上諭』を借り写す。		19 7 0 1
五月	鈴木猶人より『乾隆告示』を借り写す。		19 7 0 1
六月	沢田東江没す。六五歳。		19 7 0 1
六月	『春齋先生犬追物記』を写す。		19 5 7 2

寛政九年（一七九七）

七月	井上正意より『決獄考』を借り写す。	19	5	9	7
九月	母・利世没す。七三歳。				
九月	「寛政八辰年八月異国船漂着」を写す。	19	6	7	1
十月	瀬名貞雄没す。七八歳。				
十一月	『会計私記』起筆。				
十一月	四つ時、井上弥市郎とともに登城するよう に命じられる。	17			3
十一月	支配勘定に任じられる。	17			3
十一月	吟味役、組頭などへ回礼。	17			8
十一月	会計府で猿楽配当米帳を算入。	17			8
十一月	猿楽米並びに牢屋帳面算入、佐州銀山帳面算 入。	17			1
十一月	小笠原三九郎の吟味役就任を祝う。	17			1
十一月	郷帳を読み合わせる。	17			1
十一月	御殿の詰番。郷帳を読み合わせる。	17			1
十一月	評定所にて誓詞提出。	17			1
十一月	帳面調方役所へ浅草御蔵帳を納める。佐州 御金蔵帳、御鉄炮玉并玉薬方帳の勘定	17			1
十一月	佐州雜穀蔵帳算入。	17			1
十一月	神宝方掛詰所に出勤。	17			2
十一月	出雲大社取集メ勸化之儀伺書の下書きをす る。	17			2
十一月	出雲大社取集メ勸化之儀伺書を提出。	17			8
十一月	神宝方と帳面方の兼任を命じられる。	17			3
十一月	出雲大社取集メ勸化之儀伺書の回覧が済 み、清書する。	17			3
十一月	出雲大社取集メ勸化之儀伺書を坂野喜六郎 へ提出。	17			3
十一月	紅葉山御宮御道具御修復帳を写す。	17			1
十一月	紅葉山御宮御道具御修復帳を奉行に提出。	17			3
十一月	華陽院御修復の回覧下書を提出。	17			3
十二月	御徒の後任服部長五郎より借地する旨の届 の下書を作る。	17			3
十二月	借地願を帳面改方川井源四郎に提出。	17			4
十二月	借地届書を勝与八郎に提出。	17			3
十二月	琉球人登城のため、下勘定所は休み。本念 寺に参る。	17			3
十二月	西丸御安鎮書付を写す。	17			5
十二月	神尾市左衛門を訪ねる。	17			5
十二月	琉球人登城のため休み。芝にてその一行を 見物。大久保西山を訪問。	17			3
十二月	加藤惣兵衛・岸彦十郎（慎齋）の組頭就任 を祝う。	17			6
十二月	寒気見舞に回る。	17			3
十二月	寒気見舞に回る。	17			3
十二月	夜五つ時、一橋中納言の神田屋形より出 火、下勘定所より出向、九つ時鎮火を確認 し戻る。	17			7
十二月	退出後寒気見舞に回る。	17			7
十二月	鍵番を次に引き継ぐ。中村七右衛門ほかへ 寒気見舞。	17			3
十二月	三橋藤右衛門宅へ寒気見舞。	17			9
十二月	護持院へ御道具見分に行く。	17			3
十二月	華陽院御修復願を村田鉄太郎に提出。	17			0
一月	三三軒へ挨拶。	17			4
四九歳		17			8

一月	四九軒へ挨拶。		①7	49
一月	荒川数馬、富原平太夫が来訪。夕方、井上子瓊・鈴木猶人・定吉らと高田にて遊ぶ。		①7	49
一月	四〇軒へ挨拶。		①7	50
一月	定吉と本念寺に墓参り。		①7	51
一月	西丸御安鎮不動尊の見分。		①7	56
一月	浅草の札差いづみや茂右衛門宅に行く。		①7	57
二月	石川雅望より月の大小の書付を贈られ狂歌を返す。		①7	62
二月	御借米を受け取る。		①7	62
二月	中川飛驒守の御勝手方勘定奉行就任を祝う。		①7	62
二月	定吉、学問吟味に出頭。		①7	64
二月	久世丹後守を見舞う。		①7	64
二月	御勘定・支配勘定出役の令がある。		①7	64
三月	久世丹後守・蔦屋重三郎を見舞う。		①7	76
四月	柳生主膳正に面会。		①7	79
四月	吉田篁墩宛に『清朝興創事略』についての書状を出す。		①9	3
四月	伊東綱達・定吉とともに中台村の農家の藤を見に行く。		①7	588
四月	中川飛驒守に面会。		①7	82
四月	紅葉山と増上寺の御霊前道具の見分。		①7	84
五月	高山孝珍没す。碑文を撰す。		①8	610
五月	鈴木猶人・宮川三省・吉見義方・定吉と高田の鼠山にて遊ぶ。		①7	86
五月	蔦屋重三郎没す。四八歳。		①7	87
五月	帰路、山谷正法寺に蔦屋重三郎の葬儀に行く。		①7	92
五月	下谷の塚越氏宅を訪問。		①7	101
六月	『寛政御用留』起筆。		①7	103
七月	塚越・比留間・高橋と源空寺にて宴。		①7	103
閏七月	鈴木新吉の佐渡奉行就任を祝う。		①9	552
八月	「賓客礼俗式」を白山義学より借り写す。		①9	552
九月	「問学礼俗式」を白山義山より借り写す。		①9	553
十一月	忍池文庫蔵『紺珠』の書写を始める。		①9	597
一月	「五十になりけるとし」の狂歌。	五〇歳	②	460
三月	「詩歌連俳狂詩狂歌みな御断り」と書く。妻里与没す。四四歳。墓碑文を撰し、六首を賦す。		①8	6110、⑥
四月	谷中感応寺前の桜をみる。		①8	163
六月	忍池文庫蔵『紺珠』の書写を終える。		①9	597
八月	上邨清縣没し、墓碑銘を撰す。		①8	611
九月	吉田篁墩没す。五四歳。		①9	596
十月	大沢侍従本『黄門白石問答』を写す。		①9	596
十二月	朱楽菅江没す。六一歳。		①9	658
十二月	『爾雅注疏考証』第一巻を屋代弘賢より借り写す。		①9	658
一月	『琉客談記』を高橋三平より借り写す。	五一歳	①9	551
一月	大坂銅座を命じられる。		①7	134
一月	銅座詰が取りやめになる。孝行奇特物取調御用方へ出役を命じられる。		①7	134
三月	岡田新川没す。六三歳。		①11	541
三月	「昌平余筆引」を草す。		①11	541

寛政十年（一七九八）

寛政十一年（一七九九）

寛政十二年(一八〇〇)

寛政十三年・享和元年
(一八〇一)

四月	自宅で毎月和文の会を開く。 「与白石大人諫書」を鈴木猶人より借り写す。		⑮	551
四月	「町方御国役品々書付」を写す。		⑮	611
四月	三井嘉栗没す。五三歳。		I	
四月	「芻虎説」を草す。		⑪	310
五月	「蘭山十品考」を井上氏より借り写す。		⑮	553
六月	「宛丘子伝」を草す。		⑮	617
六月	吉田蘭香没す。七六歳。		⑮	624
十月	大沢侍従蔵『日本養子説』を借り写す。		⑮	560
十月	「貞徳翁終焉説」を屋代弘賢より借り写す。		⑮	554
十二月	朱楽菅江一周忌。		⑮	624
十二月	『孝義録』草稿成る。		⑮	616
一月	御勘定所諸帳面取調御用を命じられる。	五二歳	⑮	134、⑰
二月	『村鑑』を写す。		⑮	617
四月	『竹橋余筆』巻一起筆。		⑮	628
閏四月	『竹橋余筆』の序を草す。		⑮	625
閏四月	『小給地方高寄稿』を写す。		⑮	650
閏四月	『和薬出産揃』を飯田町の薬店柳屋より借り写す。		⑮	553
五月	『真田伊賀守兵器改帳』を写す。		⑮	649
五月	孝行奇特者取調御用の出役を命じられる。		⑮	134
六月	山王智光院に頼千秋を迎え会す。		⑮	30
八月	『孝義録』の御用に對し白銀十枚を賜る。		⑮	135
十二月	御勘定所諸帳面取調御用に對し、白銀七枚を賜る。		⑮	135
一月	『今日歌白猿一首抄』に狂歌一首。		⑮	624
一月	元旦詩十二首を賦す。	五三歳	⑮	19909、
一月	大坂銅座詰を命じられる。		⑮	135
一月	大坂銅座詰につき金二〇両を賜る。		⑮	135
一月	鈴木白藤・杉浦西厓・仲田直躬・井上子瓊・鈴木猶人が訪問。		④	1922
二月	『一話一言』巻二二成る。		⑮	368
二月	大坂へ出立。品川大仏の前の鍵屋にて送別の宴、詩歌。		⑧	137、
三月	大坂南本町の宿舎に入る。		⑧	131
三月	『おしてるの記』起筆。		⑮	216
三月	『銅座御用留』起筆。		⑮	223、
三月	『盧の若葉』起筆。		⑮	183
四月	馬田昌調と聯句。		④	1965
四月	馬田昌調と聯句。		④	1973
四月	四天王寺にて遊ぶ。		④	1989
五月	馬田昌調と聯句。		④	1992
五月	馬田昌調と聯句。		④	2003、
五月	住吉御田祭を見物。		⑧	202
六月	馬田昌調を伴つて、木村兼葭堂を訪ねる。		I	
六月	動脈先生(畠中観齋)没す。五〇歳。			
七月	馬田昌調と十時梅厓の清夢軒にて月見。		④	2034

文政四年(一八二二)	閏一月	『杏園詩集続編』刊行。	七三歳	I、II
文政五年(一八二二)	四月	式亭三馬没す。四七歳。	七四歳	② 9 8
文政六年(一八二三)	四月	市村座にて芝居見物。 南畝没す。	七五歳	I、II
文政三年(一八二〇)	五月	『杏園詩集』刊行。		I、II
文政三年(一八二〇)	四月	『一話一言』卷五五成る。	七二歳	⑮ 5 7 5
文政三年(一八二〇)	八月	『一話一言』卷五四起筆。		⑮ 5 4 6
文政三年(一八二〇)	八月	『一話一言』卷五三起筆。		⑮ 4 8 4
文政三年(一八二〇)	一月	『四方の留粕』刊行。		① 1 7 3
文政二年(一八一九)	一月	『一話一言』卷五三起筆。	七一歳	⑮ 4 8 4
文化十五年・文政元年(一八一八)	一月	『蜀山百首』刊行。		① 3 1 4
文化十五年・文政元年(一八一七)	一月	『千紅万紫』刊行。	六九歳	① 2 6 3
文化十四年(一八一七)	十二月	『丙子掌記』攔筆。		⑨ 6 4 8
文化十三年(一八一六)	三月	『七々集』攔筆。	六八歳	② 3 0 5
文化十三年(一八一六)	九月	山東京伝没す。五六歳。		⑮ 2 5 0
文化十二年(一八一五)	七月	『一話一言』卷四七成る。	六七歳	② 2 4 3
文化九年(一八一二)	四月	『壬申掌記』攔筆。	六四歳	⑨ 5 8 0
文化九年(一八一二)	四月	『壬申掌記』起筆。		⑨ 5 8 0
文化八年(一八一〇)	一月	『一話一言』卷三六起筆。		⑭ 4 2 0
文化八年(一八一〇)	一月	『一話一言』卷三五起筆。	六三歳	⑭ 4 2 0
文化八年(一八一〇)	八月	『一話一言』卷三五起筆。		⑭ 3 6 5
文化八年(一八一〇)	七月	『一話一言』卷三四起筆。		⑭ 3 6 5
文化八年(一八一〇)	七月	『一話一言』卷三四起筆。	六二歳	⑭ 3 0 7
文化八年(一八一〇)	六月	上田秋成没す。七六歳。		⑭ 3 0 7
文化八年(一八一〇)	六月	『一話一言』卷三〇攔筆。		⑮ 6 3 3
文化八年(一八一〇)	五月	『一話一言』卷三〇起筆。		⑭ 1 8 8
文化八年(一八一〇)	四月	鈴木徳卿没す。六二歳。		⑨ 5 0 8
文化八年(一八一〇)	二月	『向岡閑話』中巻攔筆。		⑨ 4 7 8
文化八年(一八一〇)	二月	『向岡閑話』上巻攔筆。		⑨ 4 7 8
文化八年(一八一〇)	二月	中巻起筆。		⑨ 4 4 3
文化八年(一八一〇)	二月	『玉川砂利』起筆。	六一歳	⑨ 2 8 7
文化八年(一八一〇)	二月	『向岡閑話』上巻攔筆。		⑨ 2 8 7
文化八年(一八一〇)	十二月	玉川巡視に出自。		⑨ 1 0 6
文化五年(一八〇七)	九月	『一話一言』卷二八起筆。	六〇歳	⑭ 8 8
文化五年(一八〇七)	九月	『一話一言』卷二八起筆。		⑭ 8 9
文化五年(一八〇七)	十二月	『一話一言』卷二五起筆。		⑬ 4 7 9
文化五年(一八〇七)	六月	『一話一言』卷二五起筆。	五九歳	⑬ 4 8 3
文化五年(一八〇七)	五月	『一話一言』卷二四攔筆。		⑬ 4 8 3
文化五年(一八〇七)	十一月	『一話一言』卷二四起筆。		⑬ 4 3 7
文化五年(一八〇七)	九月	『一話一言』卷二三攔筆。	五八歳	⑬ 3 9 8
文化五年(一八〇七)	十一月	『長崎表御用會計私記』起筆。		⑬ 3 9 8
文化五年(一八〇七)	九月	長崎到着。		⑭ 2 9 3
文化五年(一八〇七)	七月	江戸を出自。		④ 2 9 9
享和四年・文化元年(一八〇四)	六月	長崎行きを命じられる。	五六歳	⑧ 4 0 3
享和四年・文化元年(一八〇四)	五月	『杏園間筆』第二起筆。		⑧ 4 0 3
享和四年・文化元年(一八〇四)	五月	『杏園間筆』卷二攔筆。		⑩ 2 8 6
享和四年・文化元年(一八〇四)	五月	『杏園間筆』卷二攔筆。		⑩ 2 5 3
享和四年・文化元年(一八〇四)	二月	鈴木猶人と護国寺の花見。狂歌一首。		2 2 4 7
享和四年・文化元年(一八〇四)	二月	自宅にて狂文会。		⑧ 3 5 0
享和四年・文化元年(一八〇四)	一月	白銀町東林楼にて酒宴。狂歌を詠む。		⑧ 3 4 7
享和四年・文化元年(一八〇四)	一月	真顔・米人・京伝・馬琴が来訪。		⑧ 3 4 6

謝辞

この修士論文を作成するにあたり、主任指導教員であった原田誠司先生には大変お世話になりました。御忙しい身でありながら、なかなか作業の進まない私を叱咤激励してここまで導いて下さいました。また、日頃より体調面をはじめ、気にかけて下さり、心より御礼申し上げます。また、河村先生、松田先生におかれましては御助言を頂き感謝しております。

二十巻にも及ぶ『大田南畝全集』と格闘しながら今日に至りましたが、私の力のなさがゆえに、完全に理解しきれていない点もあり、愚論であることがお恥ずかしい限りです。不十分な点につきましては、これからの課題として取り組んでまいりたいと思っております。

修士論文を書いていく中で、様々な問題にぶつかりその都度、友人に助けられました。本当にありがとうございます。そして最後になります。陰ながら私を支えてきてくれた家族に感謝の意を表したいと思えます。